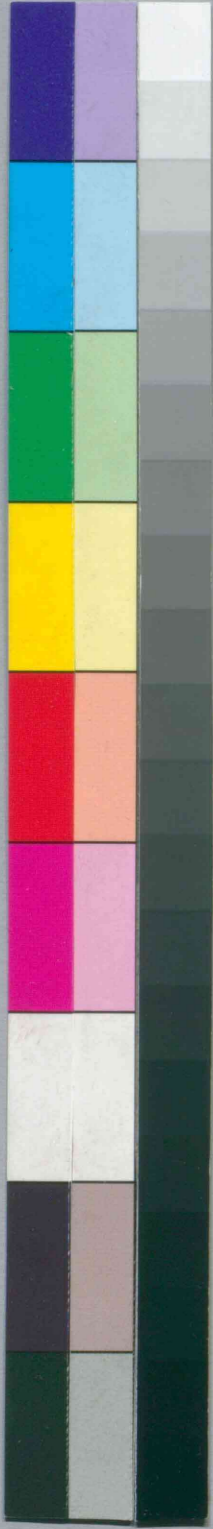


復古八卦方位辨

上

290890



新居守村著

復古八卦方位辨

二冊

此書は今傳の八卦の方位先天後天とも小正の陰陽に老少の易の筮五十五の大衍の數を以て深く考つて伏羲神聖の復の文王の奸智におくを以て精と解きつゝの人のやとを以て。白屋藏板

白屋藏板

うはきみりたゝとあさるささやあういは
さうひるはたむのなうむのまもる乃方位の
まうもあるまもいはまあむとまいさ
まうう一人うはやほむむむさうささる
さうむ一なるもみまをさしてさ解ははむは
さうぬまむのまはさうに令神さむ乃ささ
乃いさうさうさうはむむ社さうと信あさ

此書ししもめたる也し御書なるを又ある
とて之に及するをばしらも 平田の御書れ
あらるゝ之易由來記とらるゝをばしらも 先天後天の
方位のまきとらるゝをばしらも 象象の辨 亥
の方はらるゝ始開はらるゝをばしらも 亥の
は 巽卦ののまきとらるゝをばしらも 亥の
易あらるとらるゝをばしらも 亥の

子書也たらぬいよも 亥の
お書らるゝをばしらも 亥の
きと人 亥の
しむるも 亥の
たるとらるゝをばしらも 亥の
わもとよとらるゝをばしらも 亥の
らるゝをばしらも 亥の

わうしあき本尔意をもて柳よとらた動く
いつて何はまあゆとくつりて社のらたまつては
こまをまじくしあまをいぬとあははとあたま
てあをわらうらなをゆいよこまはは清乃こ
國よまをそた申あ人のあまをわらうらまを
ゆらうくとほくくじりてまあこれいほうかの
序書あまのれゆふ記うらうほけししてあの

こまわらうらうらあえあまうらうく柳
あまのこ老少清乃のまを社まじし華はま
あまのまをまたまはまをまあまのいあ
まのまをまたまあまをまあやうまを柳あ
まあ社あまのまをうらうらあまゆるとあ
けらまあまあまをまあまのまをま
まのまをまあまのまをまあまのまをま

いふことありては、
いふことありては、
いふことありては、
いふことありては、

享應元年十月

美濃守古川躬行

復古八卦方位辨上卷

大オホそらヒトツ一ヒトツのヒトツ生ナリいヒトツぞヒトツ乃モ物モノふヒトツ多ヒトツ於ヒトツ子ヒトツ分ワ判カれヒトツて
天アメ地ツチをヒトツ邪ヒトツりヒトツ其ヒトツ天アメはヒトツ高タカくヒトツ上ウ子コ位クラキ一ヒトツ其ヒトツ地ツチはヒトツ是コトるヒトツ下シタ小
所トコロをヒトツ定サ免メ人ヒトそヒトツ此コノ地ツチ子コ住スむヒトツをヒトツきヒトツはヒトツ自オノ然ツカ子コ方カタ此コノ名ナのヒトツ起ヒトツ
るヒトツ危ヒトツきヒトツよヒトツ一ヒトツのヒトツあヒトツれヒトツ處ヒトツ人ヒト情ココロ乃ヒトツ殊ヒトツ子コおヒトツむヒトツらヒトツ一ヒトツみヒトツお
もヒトツふヒトツ朝ヒトツ日ヒトツはヒトツ也ヒトツよヒトツさヒトツのヒトツぼヒトツるヒトツ方カタをヒトツ東ヒトツ也ヒトツいヒトツひヒトツ此コノ方カタ子コ對ヒトツ
へヒトツるヒトツをヒトツ西ヒトツ也ヒトツいヒトツひヒトツそヒトツ免メけヒトツむヒトツかヒトツくヒトツ經ヒトツ定サりヒトツてヒトツはヒトツ自オノ然ツカ子コ緯ヒトツ
もヒトツあヒトツるヒトツべヒトツきヒトツ邪ヒトツれヒトツ處ヒトツ南ヒトツ也ヒトツいヒトツひヒトツ北ヒトツとヒトツいヒトツふヒトツ方カタもヒトツ定サまヒトツれヒトツる
あヒトツりヒトツ志ヒトツらヒトツ四ヒトツ方カタ定サまヒトツるヒトツはヒトツ又ヒトツ自オノ然ツカ子コそヒトツ此コノ間ヒトツにヒトツあヒトツりヒトツてヒトツ四ヒトツ

○復古八卦方位辨上卷

隅^{スミ}をいふ語^{コトバ}も、かぬらば有^ルべき事^{コト}も、邪^ヤむありける。か
と四方^{ヨモスミ}四隅^{ヨモスミ}定^マりては、又自然^シに六^ムに四方^{ヨモスミ}四隅^{ヨモスミ}より運^ハ
行^クる氣^ケありて、万物^{ヨツクモノ}をおほし始^{ハジ}むるも、終^ハへるも、
おのゝ志^シ、乃^{イサフ}功德^{イサフ}ありぬ、修^{シユ}き事^{コト}なり。の^ノと按^{オモ}ひ見^ミ
れ、倭^{ヤマト}の神^{カミ}典^{ミコト}に見^ミて、させたまふ。風^{カゼ}神^{カミ}、火^ヒ神^{カミ}、金^{カネ}神^{カミ}、水^{ミヅ}神^{カミ}、
土^{ツチ}神^{カミ}、六^ムの五^{イッパレ}柱^{スツバ}乃^イ御^ミ神^{カミ}、ち此^{ココ}持^{モチ}分^{ワケ}とまひて、其^{ソノ}御^ミ靈^{クニ}の^ノ、
專^{モハラ}と係^カる所^{トコロ}ありとぞ思^{オモ}ひやらる。風^{カゼ}乃^ノ色^{イロ}は青^{アヲ}く、金^{カネ}
色^{イロ}は白^{シロ}の論^{ロン}免^メは、平^{ヘイ}田^{テン}翁^ウ乃^ノ古^コ史^シ傳^{デン}に委^イ細^{シヨク}、
見^ミゆをいふは、此^{ココ}に何^{ナニ}哉^カといふ。其^{ソノ}方^{カタ}位^チは、漢^{カン}籍^{セキ}に東^{トウ}方^フは木^キ帝^{テイ}、春^{ハル}を主^ヌる、南^{ナン}方^フは火^ヒ帝^{テイ}、夏^{ナツ}を
主^ヌる、西^{セイ}方^フは金^{カン}帝^{テイ}、秋^{アキ}を主^ヌる、北^{ホク}方^フは水^{スイ}帝^{テイ}、冬^{フユ}を主^ヌる。と
かき傳^{デン}へたる如^{ごと}く邪^ヤむるは、此^{ココ}に傳^{デン}へて、風^{カゼ}と木^キと
其^{ソノ}は異^イ卦^{クワ}の論^{ロン}せる。そこ我^ワ待^マて見^ミるべし。平^{ヘイ}田^{テン}翁^ウのい
ふは、其^{ソノ}紙^シに漉^スむら此^{ココ}ある如^{ごと}く邪^ヤむるが國^{クニ}のよき所^{トコロ}、
此^{ココ}ふあむあは、倭^{ヤマト}我國^{ウラナミ}乃^ノ如^{ごと}く、こそ何^{ナニ}と稱^{ホト}むる國^{クニ}の傳^{デン}
へ此^{ココ}あるが中^{ナカ}には、木^キ、火^ヒ、金^{カネ}、水^{ミヅ}、土^{ツチ}の如^{ごと}く、やうり用^{ヨウ}めらる
きもあむあむ。され、漢^{カン}籍^{セキ}に書^{シヤク}籍^{セキ}をいふ、紙^シ、魚^{イサ}といふ虫^{ムシ}乃^ノ
所^{トコロ}に食^{クハ}さる如^{ごと}くありとも、視^シるを、やと思^{オモ}ふ心^{ココロ}の大き

主^ヌる。西方^{セイフ}は金^{カン}帝^{テイ}、秋^{アキ}を主^ヌる。北方^{ホクフ}は水^{スイ}帝^{テイ}、冬^{フユ}を主^ヌる。とか
き傳^{デン}へたる如^{ごと}く邪^ヤむるは、此^{ココ}に傳^{デン}へて、風^{カゼ}と木^キと
其^{ソノ}は異^イ卦^{クワ}の論^{ロン}せる。そこ我^ワ待^マて見^ミるべし。平^{ヘイ}田^{テン}翁^ウのい
ふは、其^{ソノ}紙^シに漉^スむら此^{ココ}ある如^{ごと}く邪^ヤむるが國^{クニ}のよき所^{トコロ}、
此^{ココ}ふあむあは、倭^{ヤマト}我國^{ウラナミ}乃^ノ如^{ごと}く、こそ何^{ナニ}と稱^{ホト}むる國^{クニ}の傳^{デン}
へ此^{ココ}あるが中^{ナカ}には、木^キ、火^ヒ、金^{カネ}、水^{ミヅ}、土^{ツチ}の如^{ごと}く、やうり用^{ヨウ}めらる
きもあむあむ。され、漢^{カン}籍^{セキ}に書^{シヤク}籍^{セキ}をいふ、紙^シ、魚^{イサ}といふ虫^{ムシ}乃^ノ
所^{トコロ}に食^{クハ}さる如^{ごと}くありとも、視^シるを、やと思^{オモ}ふ心^{ココロ}の大き

にあがるかろう。本居翁のふまが初巻の二巻よ。
ら國の書をもいとまにむす。其外國乃あり
のふんえゝるよき漢籍も見られむ。其外國乃あり
れをの國乃あり乃文もあらず。は學問も六をゆき
たけれバ二の國乃あり乃よるつよあきくをよ
くさやうりて皇國がまぢいだよおよくしてうごうぞ
れをよるむるかろふみお見ても心はまよふらん
然まども乃國乃ありて人此心さうしく何事
をも理をなくしなむやうふこまり論ひよさまた
説ふせる故ふそれを見れむかこき人もおのけり
ら心うつるやそとまどひ也なきならひるればかろ
書えむらハ初に此ふやをまおるま伏義氏にい
き形をといふれたるは然事とる思由。伏義氏にい
へる神聖に作りやの聞をる八卦に方位哉い
で見とむむとぞ思ひ那るぬ。本居翁の歌よさむづ
るやこよのうらる

ハ十國は少名毘古那ぞ教くらせりけむを作れたる
其尻尾にそぐられたる平田翁の考定められいてへ
くうら國も伏義氏ま多伏戲庖犧もは實は我國の神
吳氏ま多春皇扶桑太帝を尊稱さるは實は我國の神
真大名持命形りけりてといふれたる神聖の作れる八
卦を伏義氏といへるは浮きよる事はちるは動くま
漢名伏羲氏といへるは浮きよる事はちるは動くま
トき考へる形むらりけれは此喻一事をいふき居
る我も思ひ得る事あくる乃書籍に方位此見也たる
あり。れよふべし。
は拾芥抄に八方をいひて震東巽巳離南坤申兌西乾
戌坎北艮寅もあらず下學集ふ八卦をいひて三震下連
雷也卯方也三巽下斷風也辰巳隅也三離中斷火午方
也三坤皆斷地未申隅也三兌上斷澤西方也三乾皆連

天戌亥隅也。三坎中連水北方也。三艮上連山丑寅隅也。
や見とたり。此は漢代ふよれる形は漢代が一六の書籍
は。釋名をを一免皆去の形。去むらく目をや。居て
よく思ひ見るよ。西は金ノ神の御靈乃專モハラやかゝる方也。
此御神は我國乃古傳ふ。金山カナヤマ昆古金山カナヤマ昆賣ノと稱奉り
て男女オノメまを神たり。其名義は本居翁の枯惱カレノヤみるりと
いそれる。實ミコト子志シうるべもむ。其悶熱懊惱ツクアツカヒオヤマレ之時トキは。
吐クダリ子成ナリまをりと傳へてあれはあり。又かゝ人太公望
といへるハ。城之氣出而西城可降といへる。又りの釋

迦をいへるはひるをら子心をよせさ替て人草をか
取さむやとて。西方淨土とせける形なり。又今の現
子。西よりふき来る風を。草木キクサ志を。事明アキラるり
さる功德イササある方ぬるを。そ此方小。万物悦懌エツシをさん
る兌卦ダイをを忘おきふり。去来キヤクをいへる俳人ハヒさへ。秋風
出イデせ。此風乃ふきおこるは西あり。兌は澤なり。や
いふ。それ澤は。玉篇小。水停。曰澤。又光潤とあるなり。
あれ何や。を思ひぬら。につけて。天なり君なり
と。いふ形。乾卦此位。成亥子藏クワンをたて。と。う。留
一。つ。海ウミ犯オカしてあ。り。ら。ま。一。又巽ハ風るのといへは

る此方子辰巳藏^{カラブミ}をて。おいたて、よのらまゝやハ、や
ぞおもひまどいよける。さうらふ富岡此里^{コノクスレ}に行^{ユキ}
るおいで。一万田玄達とす。ををまらひて。此^{コノクスレ}鑿師
は漢籍^{カラブミ}をくるれば。八卦乃方位はいうにぞや。と問ひ
ふ。後見初るふ。古^{フル}くより傳へ来ぬる。心せられて。
乾ふイヌ井巽^{ツツミ}と。いふ訓^{ヨミ}もあるもの。と。そ
乃訓^{ヨミ}を例^{タズレ}にむき出て。ふをけゆる。いふらう。其^キは
わろくゆがぬる定規を。きいて思ひよまる。形^{カタ}りとい
らふれば。さうむそこ此心乃はふく。せくもの。して

よ。論^{サダ}めぬらまゝ。いのにうけ。のむや。を
ぞいふ。さる事か。かくおろいより。みり捨むはい
ふういれければ。その那^ナら子思ひ。まゝ。やいひ。教
つもちう。れ。帰^{カヘ}るさふ。書林^{フミヤ}またちよりて見れば。
易學啓蒙要解。といふ古き本^ホを目にう。まけ。八卦
此方位をおもふを。う。は。朝^{アサ}なく。拜^{マカ}み奉
る。御神^{ミカミ}の授^{サツ}けるまへる那^ナら。と。おほゆれば。
我^{ワレ}よ。せ。て。よ。と。懐^{フトコロ}よ。お。入^{イレ}れ。家路^{イヘヂ}を。さ。して
いそだぬ。されど其夜^ヨはあゆみ。事ありて。一^{ヒト}ち

見ざりければ、何くるおそしと待居て、文机の塵う
ちをらひつゝ、見もて行くとふおぼつゝのれきふ、ちれ
みをけるは、ふみ那れぬ學びの道なれは、あまづし一
こくり見て、頼杖つきて、目と心とを休息いせ、伏
義八卦圖を、何る方位を見るふ、兌卦を東南の隅よす
志、艮卦を西北の隅よおき、此はいやも免傳とし
とおもひは、物皆は時世にまゝつゝひて改まれば、皇
神此定めさせもる、それむらゝるま、那るは、春夏秋
冬、此うつりのけり、に那むあれば、一時三月、那る十二

月を、八卦よおしあて、見るよ、辰巳は三月四月、おれ
は、山に櫻を見やりは、苗代小田に種をおろし、この
は、初時鳥の志のび音き、お、こさ田に早苗やりを
トむる、小バ、民らも、樂し、多頃ふ、那む、され、志の思ふ
那り、又戌亥は九月十月、るれば、草木に氣は根よかへ
て止まり、民らハ、稲蒔ほし、か、刈は穀とり、収むれば、志
の思ふ、れり、さるうらに、山澤通氣といへ、ふ、那る、信し
さて、今よ、いぬ、あも、那みは、藏にあり、所と、いひ、傳へて
何る、は、う、ゆ、き、神國、那り、けり、か、と、六、此、二、卦、此、方位

を東に離を南に坎を北にすゑはよし其外は皆
いふぞや。ちろく考ふるよ。こは實ニコトに姫昌が作りこ
へる偽方位にて。他乃まうけらるにはあらどし
かくいふをいぶかみ思ひ人のあるべけれ。我
思ひせれるよしをいさしりむ漢籍史記といふ
とニ現ニまニあるよし自ニ以テ為ス獲ニ水徳之瑞ヲ更ニ名ニ河ヲ曰ク徳水而正ニ
以テ十月色上黒とあり。註は漢書音義曰五行相勝泰以
周為火用水勝也。と見延ニあり。六ニよりおニて按ニふよ。
殷と艮卦として周乾卦を用ゐて勝る耶ニはニ正ニ
る小十一月を以てせるニ同ニドニはニ耶ニはニ正ニ
ふに國を傾けむニさニる呪ニ詛ニせるよしこそありけめニま
て姫昌は聖人れまニ祚ニをさニるさニうニらニるりけれ
む。殷をほろニふさニじれ下心を人ふさニせニる水ニを深ニ
心を用ゐてニまニ何ニ筮法を改免て人を威ニしニそニまニより字
書に坤ハ從土申とある申字を未申れ申なりと也と

まニて此卦を西南におきニへニさニておニのニが心ニれニま
また万物をふるむニは風より疾はれニしニりニふ功德
何ニる異卦ニはニ子發ニはニ多ニをニへニて辰巳にニそニあニてニ水
よニあニひニむニるニせニぬニど方位を直せる耶ニはニ心ニあり
む人は考されニ先ニ天ニをいニふ耶ニはニ伏羲氏れ名ニのニミ
よニてやニからニ後ニ天ニをいニふ耶ニはニ文王ニの逆心ニあり
よニてのや見ゆれニあニふニしニ志ニのニありニらニふニ皆ニたニのみ
れニる八卦ニは方位にニあニるニ又ニ此ニ註釋ニどニもニの
かる事とえニやニらニ耶ニはニ人ニのニ耶ニはニいニのニにニぞニめ
やおほゆ平田翁の三五本國考よ世に史學家れニミ
よ非ニんニ謂ニゆる六經諸子耶ニどニを解ニするニと見るニよニ瑣ニ

瑣たる章句此間に於ては解得ざるも一以て百に
當る大義小於てハ解得ざる事多う也然るは彼國
人此性元より鈍く皇國人此固より俊邪るふは似ざ
此察めず然る小此皇國人も常小彼國籍のみ淫れ
る徒はゆや俊逸邪る性變て其漢習つひ小其性此
如く成て芳蘭の質邪るも鮑魚此肆久く置ては
遂よ鮑魚の臭に變れる如く俗此儒者るどま漢人
此と鴛才も成りて世乃限り其學此大義を心得知
びて終る倫も多うる也といふれるるまこ也

このおろの邪る守村然る註釋どゆあひのり
るはいに鈍く邪りゆきをまいでや霜此れ
葉はゆり捨てゆや乃根ざりによりて新草此れ
けしきをつみ出むやとゆひ邪りてうら見るま
りき物の河圖にぬじありける繫辭上傳云河出圖
洛出書とあるを
我はゆらんこの圖上陰陽を黑白りて見やすかき
那をさばさるものも其數をかきうぞへ見れを
この古傳へ見ゆていやく尊一其ハ天神本紀に
饒速日命の天より降り給ふ時に天於神此瑞寶十種

を授きせしむる事あり。その六に教詔曰く、若有痛處者、合茲
十寶、謂一二三四五六七八九十、而布瑠部由良由良止
布瑠部如此為之者、死人返生矣、と見ゆるなり。此事職貢
令集解に
又天孫本紀に、鎮祭之日、猿女、君主其神樂、舉其言大
謂一二三四五六七八九十、而神樂歌、儻又江家次第に
次、御巫衝宇氣とある處に、小書に、神琴師、彈和琴、衝宇
氣、神遊儀也、神代上卷に、ウケ船フミト、バロカス義也。
以賢水衝船上也、結系自一至十とあり。又今此現に、我
里れあさりては、うき瀬におちて此、人死那むやと

まどひささるるは、必ださるるに人川べよとあり。ま
則おちりてみそぎし、神小願多て、手りて水とむを
びつ、一二三四五六七八九十、ととりかへし、く聲
高し呼り、其聲の調ひてきこゆれば、生るといひ、乱
がられれば、死ぬといふ。是を凝取ととり傳へ来て、
か、いさき事よるしをる。此事上、神なきとら此皇國は山
の奥、鳴乃さきぐ人里ありむ
有りぬべし、い傳へて又か、い此繫辭上傳にも、天一
地二、天三地四、天五、地六、天七、地八、天九、地十、天數五、地
數五、五位相得、而各有合、と見ゆるなり。されば河圖よる

かりて考ふるこそようらえと。此圖を机に上にお
むろげおきて、目を開きたり閉ぢありて、うちま
るよ、いよ、伏羲氏は大國主、神にわたり中なる
とぞおほゆる。大國主、神は天の神の御教へ此一二三
四五六七八九十、此數乃のいさ事は、もとより、
須佐之男、命に、志を、おほし、けれは、
天に五星、地ふ五岳、あるゆゑ、
へは見、延、其は、延、あま、うら、
ふるよ、や、あ、む、必、あ、る、べ、き、事、
居、ま、ひ、け、む、須、佐、之、男、命、此、青、海、原、潮、乃、八、百、重、を、
給、ふ、事、は、い、ふ、も、さ、ら、れ、り、天、の、壁、
天に五星、地ふ五岳、あるゆゑ、
へは見、延、其は、延、あま、うら、
ふるよ、や、あ、む、必、あ、る、べ、き、事、
居、ま、ひ、け、む、須、佐、之、男、命、此、青、海、原、潮、乃、八、百、重、を、
給、ふ、事、は、い、ふ、も、さ、ら、れ、り、天、の、壁、

川極、迴、ま、る、く、繫、辭、下、傳、に、古、者、包、犧、氏、之、王、天、下、也、仰、
傳、へ、し、あ、る、く、則、觀、象、於、天、俯、則、觀、法、於、地、觀、鳥、獸、之、文、與、地、之、宜、近、取、
則、觀、象、於、天、俯、則、觀、法、於、地、觀、鳥、獸、之、文、與、地、之、宜、近、取、
諸、身、遠、取、諸、物、於、是、始、作、八、卦、以、通、神、明、之、德、以、類、萬、物、
之、情、と、あ、る、よ、う、の、お、し、の、ら、る、諸、五、星、五、岳、は、さ、
る、事、よ、う、鳥、獸、此、文、小、大、う、る、五、草、木、此、花、び、ら、も、先、は、
五、我、手、足、此、指、十、指、が、ら、も、五、よ、こ、う、れ、て、手、此、中、指、を、
ぬ、け、出、て、あ、る、よ、う、の、五、數、は、云、も、さ、ら、れ、り、天、有、九、重、
人、亦、有、九、竅、此、は、漢、籍、此、淮、南、乃、九、數、を、も、お、ほ、し、
那、る、べ、し、然、が、ゆゑ、ふ、一、よ、り、九、に、い、る、が、用、數、よ、う、

穴持命乃申給久皇御孫命乃静坐大倭國申天已命
 和魂乎八咫鏡取託天倭大物主櫛玉命登名乎稱
 大御和乃神奈備坐已命乃御子阿遲須伎高孫根
 乃命乃御魂乎葛木乃鴨能神奈備坐事代主命能御
 魂乎宇奈提坐賀夜奈流美命能御魂乎飛鳥乃神奈
 備坐天皇御孫命能近守神登貢置天云々とあり此
 は大御和葛木宇奈提飛鳥と四所坐せざるは四偶
 此法にて真中皇孫命と静り坐せざるは御意とぞ
 思ひ奉らるる。かゝるの七書といふ中那る問對卷上
 大宗曰數起於五而終於八則非設象

寔古制也卿試陳之靖曰臣按黃帝始立丘井之法因以
 制丘故井分四道八家處之其形井字開方九馬五為陳
 法四為開地此所謂數起於五也虛其中大將居之環其
 四面諸部連繞此所謂終於八也とあり考へ合はべし
 されは動くまじき證あるはとぞ思ふはとぞ考
 する小此四隅にかゝる事は天子五星地は五岳あ
 るを備を天の壁たけ極み廻りてよく志後しとし
 給ふめる須佐之男命此此大神にやへおき給へは
 ともやあらむ又おもふ天翔國翔て天下を見廻るま
 へる天穗比命小媚つまつておろしけれは此神も五
 星五岳此事をかゝりけむとるころ五數のりし

き事を安んずるにきまへるなりとも思ひ出
らる。此法此猶まきく、此書籍不見延るは延
喜式祝詞中那る御門祭に、四方内外御門、如湯津
磐村^{コト久サヤリマシ}塞坐^{氏テヨモ}四方^{ヨモ}四角^{ヨモ}與^利疎^{ウツ}備荒^{アラ}備来^コ武^ム云々とあり。
又鎮火祭道饗祭との小祝詞こそ見延於宮城
四隅祭と有那又延喜式一^{五十三丁}五^{十四丁}り心かく見延あり。
新いて云む此萬延元より四百三十六年ばうり乃
む一^人一条禪問兼良公此撰せられ公事根源
に近頃は絶也で侍るよや書せられ道饗祭とい
ふ名たよまらる人乃くるりよを歡しきる如茂
翁本居翁乃道の事を大^キ説平田翁其も委細く
諭れられ海相會比山近き片里にまむ我さへ皇國此

古へ了心をおもむけ道饗祭此のこま事を思ひ
あがりて我村は年々疫病神乃入りやまうりけれは
ひ興して安政元年六月初ごり此日大ぢらひを
取おこ那ひ道饗祭をも一^免にけりそれよりは入
来にかりにたて同五年俗人乃コロリと云ひてい
も恐る病れもやりて其あしき氣此隣村ま荒び
来しけれは改免て道饗祭あへまぢり又同六年も
あき有れを又志の祭れ故よやあらむ此病よ
て死なる人獨も那り然るを此凶き氣京都に
もみちて金左衛門伴氏^{此信友先生}まがりり谷森氏
種案^{先生}此事問ひ出るるに於て驚きけり道
饗祭此事問ひ出るるに於て驚きけり道
さ、免く友もわれどさらにおこり来るは歎きれ
るといひおこせたり異國船乃より来るは歎き
はいつてこれ道饗祭をば思ひおこり
人たちのおほくわれ
一藤原宮御井歌よ八隅知之云々兼妙乃藤井我原爾

オホミカドハシメタヒテハニヤスツミノウヘニアリタレシレタマヘバヤマトノアラ
大御門始賜而埴安堤上尔在立之見之賜者日本乃青
カグヤマハヒノクテノオホミカドニハルヤマトレシミサビタテリウチビノ
香山者日經乃大御門尔春山跡之美佐備立有卦火乃
コノミツヤマハヒノスキノオホミカドニミツヤマトヤマサビセリミナレ
此美豆山者日緯能大御門尔弥豆山跡山佐備座耳為
ノアラスカヤハソトモノオホミカドニヨロレナヘカミサビタテリナハレ
之青菅山者背友乃大御門尔宜名倍神左備立有名細
ヨレノヤマハカゲトモノオホミカドユクモ井ニゾトホクアリケル
吉野乃山者影友乃大御門從雲居尔曾遠久有家留云
云々あり此ハ大御門乃四郡さすとう多つる形め
アとぞおひふさて真中に大王乃静リ坐せむ四角此
法りていふへ此大御門はうれらんかくこそあ
け免猶志いておひふふ大御門は四なるが故に御門
と称せどやびて大王御事よおしおよぶか

よか一は此説文やいふ書籍に誦也王天下之號也
ある帝の字ふミカドヤいふ訓もあけくよこそと
さへぞおひひやらるるこれ拾芥抄下學集に見ゆ
てあはは陽明待賢郁芳美福朱雀皇嘉談天藻壁殷富
安嘉偉鑑達智此十二門郡を續日本紀に朱雀門土生
門美福の門郁芳乃名見ゆれを早くかくおりよけむ
あらく思ふ三月一時那れを四時此月敷もて志
うせらるるあべいされ四門が十二門よりあは
アハれは法はおれ又古事記中巻に曙立王菟上王二
王副其御子遣時自那良戸遇跛首自大坂戸亦遇跛首
唯木戸是腋月之吉戸ト而出行時云くやあは按ふに
戸は猶ありけ免と此は奈良戸大坂戸紀戸にてはれ
四角此戸あはむと今一はらに要るけれあはらせ

る那らむとぞ思ふ。偕又日本書紀神代上_二。為壞鳥獸
 昆虫之灾_{ハツ}異則定其禁厭之法_{ハツ}とある。されまゝぬい乃
 法。いづくのいひ傳へてありぬむ。得るよしもをれ
 いでくくと大神も祈りて。此年頃こひをり一城
 金澤市五郎艶_{ネウ}がふりてへ来て。此男は書籍こそよ
 ぎいて。土を嘗て其あぢいひをあり。草木も心を
 め。うけの庭の葉に葉の事れくも出けりと。さあ
 らぬとによりて。病人のありぬも。蜂こそれぬ
 ちりて見る。とす。そ一ま子ぬり
 禁厭とある老人より得りて。は。こを。見いふ。空言に
 はいりぬといふ。其はいやゆの。いのにと問へ。手

心に佛字をかき。ホフノムシと大指より小指までか
 ぐ。ふせ。アピラオムケムサバカと唱へ。巢をこぎと
 さい。那るところ。ふ。おのれいけらく。大指を真中に
 ふせて。夫より外_{ホカ}乃指どもに。おさめるさ。ゆ。すれは
 ち四角此法なり。是ぞ大穴持少彦名命にふ。あらむ。さ
 るを僧の心_{ハラ}えろけれ。は。わ。道と尊がらせむとて。さ
 り傳へ来。い。な。を。り。され。は。佛といふ字も。う。び。ア。ビ
 ラ何とも唱へぬ。む。法に。お。こ。那。ひ。て。とりて見て
 よ。と。さ。ま。ぬ。二日三日ありて。ま。ま。ら。ひ。来。て。い。ふ。や

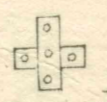
此は夏此方にて陰氣おこらむとすれど、陽氣盛なり
 ればあはべし又○○と東におきて、それ玉との
 とくはへし○○○○○○と作せり此ハ春此方
 にて陽氣顯れそむれど、猶陰氣がらぬれば法し
 又○○○○と西におきて、それ玉とのとくはへて
 ○○○○○○○○○と作せり此は秋此方にて陰氣
 顯れそむれど、猶陽氣がらぬれば法しさて又中
 られば數此起るも止るも五那れハ五にとくはへ
 て○○○○と作せりなる法し是具れる數那れハ大極

中那むたむを忘おとすくおほゆる十を大極とす
 来ふそれ法あやぶむ人此みなるべしを偽筮法にふれ
 易學啓蒙要解ハ河圖之虛五與十者大極也奇數二
 十偶數二十者兩儀也とあり是はあはらむといつど
 目と者とて心用おせし所と那む我早くさてそれ奇數が偶
 數よかりり偶數が奇數にハはる則易此起る所易の
 出る所ありけりを思ひやらるはさる事にて一寒
 一暑四時れそ那りてある黑白の目志るし那れど
 おほし見べきとあはらむと外轉のそりぞへ見れど三
 十ありて一月の日數ありさるうらよ陰陽ハ七にて十五

九陽 六陰
大六 二五 かく半月乃日數のそなりそある事
はりふもさうあり内轉此をよみ見れ候十ありそ上
旬中旬下旬のとおりのやらる又東西此陰陽のはい
のにと白きをかぞふれむ三や九とて其數合され
候十二なり黒多候と免バ四や八やとて是も其數十
二なり此八月此十二乃數とあらる又南北此をかぞ
ふれ候白きハ一や七やにて八なり黒きハ二や六と
ふも是も八なり此は八節此數と思ひやらるこの見
れ候見るまなく思へ候思ふまふなく天地の道そ

那かりそいとそえをそく妙なるは此瑞寶授き
せて饒速日命天津神此をそへ給へる其數りて大
名持神此神をそりにそへ給ひて真中に五數をす
志置て作らざる故ぬらべいとぞ思ふされどはらり
古書どもは河圖をいへる事此那々候バかくらふそ
志ひてそとめてひのみにそゆと事このみとおひ
人もあつづけれど平田翁のあれ説ハ學者此さうい
をこほる物知にいふぬら那りとおぼゆる阿やうに
上ふいつる神賀詞るる四角此法をそとめりてり候

つれ接ひ得よこれ其彼邦も伏羲氏といふは、い
よ〜大名持神此漢名と、思ひ定めらるるに事い
でいにいさむ我心おきては、本居翁のよめ、傳へけり。
明くとも似る類、あらは、行のになをて、志の事い
阿みむとりふ、つ〜考ふるに、一寒一暑と、黑白も
て、さるせ、其生數成數此多少して、四時を明かせ、は、
真中此玉ものによりて、るれば、それめて先陽爻陰爻
を作り給ひて、八卦に、い至る、形、べ、爻、繫辭下傳、
乎内吉凶見乎外、といへ、徳ある爻、るれば、玉ものな
らて、何よよりて、作り、るる、多、と、お、る、り、
かく、お、り、ひ、る、り、て、見、れ、ば、陽、爻、と、一、か、く、作、り、陰、爻、は、

一、く、作、り、来、れ、る、よ、明、る、り、其、は、玉、の、成、字、形
に、作、せ、ば、、う、て、則、十字形、五、此、古、文、は、×、なり、
縦、横、二、為、れ、は、十、形
ま、い、づ、れ、も、四、方、中、央、備、り、て、二、繩、乃、正、し、き、事、お
た、い、づ、れ、も、十、也、易、に、又、×、と、も、易、ら、む、河、圖、は、縦、横
此、二、繩、を、む、ね、る、れ、は、十、な、る、べ、爻、を、用、數、ハ、×、なり、洛
書、ハ、四、角、此、二、繩、を、む、ね、る、れ、は、×、い、べ、る、れ、ど、用、數、は
十、なり、え、も、い、ち、ぬ、あ、ぢ、ひ、あ、り、て、實、玉、玉、の、り
那、む、こ、此、十、ハ、八、卦、の、正、方、位、を、志、る、べ、き、玉、の、な
れ、は、お、い、に、い、ふ、を、や、く、心、に、と、お、これ、縦、形、る、を、
お、き、て、未、乃、さ、ふ、免、を、見、つ、べ、し、
横、に、其、跡、横、此、ふ、、一、く、さ、や、り
る、那、セ、拔、取、り、、は、、一、は、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、
二、見、ゆ、一、は、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、
兩、地、に、て、陰、れ、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、
事、論、を、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、
され、ば、爻、は、十、に、る、り、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、、〇、〇、
一、爻、は、交

也。象易六爻頭交也。や見止ふり。守村大道を安く直く
正しくけれ心めて見れば。八卦は一卦三爻有り。さ
るを六爻やいへば。重爻此ときこゆ。其本と捨て。未
て作れらむ事。いかに。此は八卦をうち忘れ。六
十四卦とおは延ぶる人。や註せらるる。つとく。そ
うし。其本とつとて見れば。十比。これ。重て。それ
れに用ゐる。爻字。るる。に古文の×を重て。作れ
る。其。十と×と。重て。字形を見。とく。皆×
に。して。作り。と云む。諸爻。字。交錯比義。は。二繩。こ
ぬ。我身の心。やすさは。人。より。へ。つり。み。だ。て。思ふ
る。心。を。繫辞上傳。易有大極生兩儀。といへ。當小
傳へる。此は淮南子天文訓。一而不生。故分爲陰陽。
とある。同義。外。づ。も。説文解字。十。數之具也。と見

る。その字形より。兩儀とる。これ。大極といへ
る。ぬ。べ。猶思ひ見る。に。十は。一縦。これ。太一。一
横。これ。至極。此。字。なれば。一生。二比。義。より。つ
も。十と一。これ。差別。ある。べ。其の。數の。極る。所。ハ。十。乃
る。う。ら。に。う。ぞ。へ。て。極る。所。より。なれば。百も。千も。万も。
皆。一。る。れ。じ。百。や。呼ぶ。づ。さ。所。を。い。つ。や。り。十。とい。ま。じ。
され。大極。ハ。數。れ。棟。も。太一。ハ。何。ら。じ。に。い。で。い。
い。ま。じ。天地。を。免。の時。高。天。原。天。御。中。主。神。生。ま。す。
次に。高。皇。產。靈。神。皇。產。靈。神。な。り。は。せ。り。け。る。又。虛。
中。一。物。な。り。此。物。に。て。天地。と。は。な。れ。る。な。り。
漢。土。も。上。皇。太。一。生。り。次に。盤。古。真。王。大。元。聖。母。夫。な。れ

又道立ニニにありたり。天地と造分にあはれ易なり。ける。されは其本は一。生ニありあり。さる。二。易の。生。二儀。大極と。思ひ。僻めけむ。大極。謂。天地未分。之。前。氣混。而為。一。是。大。一。也。と。又。一。大極也。二。天地也。といへる。人もあり。此は其本。大。一。と。ありて。大極。或。い。ざる。あり。多。く。一。儀。算。比。下。玉。と。あり。上。玉。比。五。あり。事。と。あり。で。一。儀。算。比。下。玉。と。あり。上。玉。比。五。解。字。又。極。棟。也。と。見。也。同。書。に。棟。極。也。と。あり。諸。說。文。こ。り。て。極。は。キ。ハ。ニ。ル。と。い。ふ。詞。ふ。り。棟。は。ム。ネ。と。い。ふ。り。用。の。来。り。是。と。心。に。ありて。見。れ。む。い。や。ぬ。其。は。數。と。一。より。か。ぞ。へ。て。さ。ハ。中。る。所。が。十。り。て。數。比。一。む。ね。あり。又。一。より。さ。り。へ。て。さ。ハ。中。る。所。が。二。十。り。て。二。む。ね。あり。い。ふ。べ。き。あり。の。る。が。ゆ。ゑ。に。數。の。き。ハ。倍。り。て。む。ね。あり。所。は。十。に。あり。む。ね。あり。十。が。大。極。の。事。い。や。く。明。く。あり。又。按。ふ。に。易。は。や。が。河。圖。の。れ。は。此。生。數。比。は。五。り。所。ハ。五。あり。此。圖。比。む。ね。の。る。所。は。五。り。其。五。と。字。形。了。す。れ。は。十。那。又。洛。書。比。五。は。八。方。比。數。り。て。見。れ。バ。十。那。比。五。圈。と。大。極。と。い。え。

ま。け。り。ま。は。ら。ち。を。れ。ど。易。は。む。ね。と。成。數。と。用。る。れ。を。安。置。せ。さ。ら。び。き。大。極。は。數。比。極。の。所。比。十。と。あり。ある。ろ。は。大。衍。比。所。に。云。べ。し。太。極。に。あ。り。て。小。圖。說。と。り。ふ。さ。へ。有。り。て。鮑。魚。比。肆。の。如。に。て。其。五。の。臭。き。香。の。満。ち。て。有。れ。は。吹。拂。は。け。り。か。く。諸。陽。及。陰。及。と。作。り。ふ。き。さ。ら。び。が。氣。比。風。り。か。む。給。へ。れ。は。一。少。せ。ふ。温。さ。暑。き。涼。き。寒。き。四。比。の。け。り。あ。る。そ。れ。温。さ。い。暑。さ。に。移。る。ろ。い。涼。さ。は。寒。き。に。移。る。ろ。れ。は。寒。と。暑。と。に。大。小。比。あ。る。が。如。く。河。圖。り。て。白。き。數。の。多。き。九。と。大。陽。と。一。少。陽。と。一。少。陰。と。比。ミ。い。ふ。傳。へ。來。黒。き。數。比。多。き。八。を。大。陰。と。一。老。陰。と。比。ミ。い。ふ。傳。へ。來。

れり其は大誤有り。そ此誤を誤りやと云ふは三月十日
日少き故に志のりふなり。又人に老少あるは三十日一
とるべし。年數れ多きを老女やいひ年數れ少きを少
女といふなり。はれれ此大小老少を大誤有る事
いや也。すくはれれ少き六を少陰と志給へる
猶也。此六を大陰といひ傳へ來ぬるも大誤有り。其
那。此六を大陰といふが如し。傳へ來ぬるも大誤有り。其
といひ誤り傳へ來ぬるは。いひ千年たりあり。さ
ざれ石も巖とあり。苦むををり久しく。さあ
る免志の久しき世に一人も此は誤り。心
多めらがるも漢國に駑才の學者も。ちふ。ひま。心
りて。漢習乃巖に如く。心と變て鈍くあり。若く
心。つきて。あれれ。心乃石のさし出て。さあ
さ。動にとも。それ心乃石のさし出て。さあ

げ。そ此心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。
も高瀬此里に。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。
も易道の八衢。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。
ぬるゆゑは。漢人れ性。元より鈍く。四時乃中。冬
けてある。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。
より寒き時。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。
る。事いち。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。
る。事いち。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。
傳へ。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。
れ。陰氣れ退く。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。
定の。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。
息也。陰動而退。變ハ之六象。其氣消也。といふ事。其
て。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。
入。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。
世儒徒。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。
書籍。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。
れば。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。心乃苦を。

變作者どもに何うもいふ。説文有るは變於八正
於六と有りけむを。か此變ハ之六といへる。ありき傳
へがトとき傳へと耶。そのてめる世乃學者のさう
よ上下と字をかきうつるる。其は同書に成
別也象分別相背之形とあるを思ふにハは陰なる成
數此極み耶。然則陽了變はるに上りて象分別相背
之形といへるる。居む鈍き學者は河圖にて見よ
ハは黒き數に於て。やがて白き數に於て見よ
陰は變する所。見よ。白き數は分別相背と事い
る。數此六にうつれ。九は陽之變也といへる。又按ふ
ふ分別相背く字形ハ八耶。と陰正於ハといへる。陰正
きは事此ある。入ハといふ。六は陰なる成數乃
に从ふは陰に於て。入ハといふ。六は陰なる成數乃
くさほるりとぞおひふ。八は陰に正於六也。こそい

ふ。登き。形。水。又。同。書。に。午。陽。之。正。也。と。あ。る。考。へ。合
け。べ。き。る。り。六。に。あ。ひ。む。七。ハ。了。の。ひ。む。は。思。へ。諸。又
九。了。て。二。繩。正。一。矣。耶。了。心。の。は。入。は。思。へ。諸。又
論。む。陽。動。而。進。陰。動。而。退。と。い。へ。る。の。進。退。此。二。字。と。
上。下。の。二。字。と。か。へ。て。見。よ。輕。清。者。上。為。天。重。濁。者。下。為。
地。と。あ。る。古。き。傳。へ。と。同。義。る。事。あ。き。ら。の。耶。了。さ。る
と。陰。陽。老。少。此。事。に。と。り。な。り。て。變。七。之。九。云。變。八。之。
六。云。と。い。ひ。る。一。し。り。此。説。上。學。者。此。を。と。く。さ。は
ゆ。や。見。返。て。ぬ。け。る。見。ゆ。ふ。隋。に。蕭。吉。と。い。ふ。人。も。此
了。す。は。是。ふ。さ。う。り。ぬ。れ。ど。我。れ。は。さ。ら。に。聞。ぬ
耶。了。此。は。お。ろ。さ。故。了。の。中。に。陰。氣。は。冬。が。盛。了。て。大。き。に
時。に。氣。と。り。て。考。ふ。る。に。陰。氣。は。冬。が。盛。了。て。大。き。に
春。又。了。中。の。形。了。陽。氣。は。夏。が。さ。う。り。て。大。き。に。秋。了
了。中。の。形。了。され。河。圖。乃。陰。陽。也。冬。は。白。き。が。一。了。て
黒。九。の。六。耶。れ。ハ。陰。氣。さ。る。に。残。る。さ。す。る。春。は。白。き
三。了。て。黒。九。の。八。る。れ。大。き。に。残。る。さ。す。る。夏。は
黒。き。三。了。て。白。き。七。の。七。の。陽。氣。さ。う。り。耶。了。夏。は
る。秋。は。黒。き。四。了。て。白。き。九。の。九。の。陽。氣。さ。う。り。耶。了。夏。は

○復古卦方位辨上卷

○二十四

は老陰變して少陽と成る。老陽變して少陰と成る。一繩ノ入れて分ける。十五老と十五少と此左と右の差別は。東春南夏西秋北冬をいふ。漢人多し考へざり。東春南夏西秋北冬をいふ。此圖は東西が陰陽此老數也。南北が少數とす。十の御心せざるをいふ。伏義神聖此志。御心せざるをいふ。誤りざり。故と。此の諸も生れをいふ。十四氣此一氣此數あり。其數合せて三百六十日なり。是定りたる大なる此數なり。一歳三百五十四日に終る事あり。又三百五十五日此一歳あり。又三百八十四日三百八十三日乃一歳あり。二十四氣此中にハ必一氣十六日

此の繩もあはれ。一繩ノ外一氣十四日なり。今一繩ノ入れて見ると。此の繩ノ外一氣十四日なり。少陽老陽此七九乃數と合せ見れば十六。少陰老陰此六八乃數と合せ見れば十四。其六をりては。老陰を六少陰を八とせるは。論を誤り。此の繩ノ外一氣十四日なり。故と。阿の此は少と。仲景は張仲景が著述あり。平田翁のいへり。仲景は太極左宮葛玄字孝先と。然る寓名此仙道此法。世傳へたるに。師多しハ易と心と深め。孫傳あり。此陽數七

陰數六といへる。目をつけよ。人と交りぬ。其は鑿道と云れる。鑿師は邪き故るべし。されば禁厭は法。心と懲れるはさうにたし。いや邪げ。き事に。周は姫昌は。文王とあは。奸意深きは。あ。老陰は數は八。少陰のは六と心得。い。げ。り。そ。は。う。れ。が。筮。法。は。三。少。陰。の。は。六。と。心。得。い。げ。り。そ。は。筮。法。と。論。ふ。所。に。い。い。で。也。八。卦。は。な。れ。る。ゆ。え。よ。し。を。ふ。を。し。待。て。見。よ。い。い。で。也。八。卦。は。な。れ。る。ゆ。え。よ。し。を。い。ち。む。上。ふ。い。へ。る。如。く。ハ。グ。大。陰。七。が。少。陽。九。が。大。陽。六。が。少。陰。と。春。夏。秋。冬。は。四。時。は。了。る。れ。ば。其。一。時。ハ。三。月。の。り。を。り。て。大。陽。は。九。は。一。爻。を。三。爻。重。複。て。乾。を。名。づ。け。て。天。陽。の。象。を。萬。物。を。生。ぜ。さ。す。る。德。に。よ。り。て。父。を。稱。し。又。大。陰。は。八。は。一。爻。或。三。爻。の。さ。り。て。坤。と。




名づけて地陰の象。萬物を生ぜさるる徳よりて。母を稱せり。此乾坤あひ索て。六子を生ぜり。震は。乾父を此初九をとりて。坤に索て得るふれば。長男といひ。巽は。坤母を此初八をとりて。乾に索て得たるふれば。長女をいひ。坎は。乾父を此九二をとりて。坤に索て得るふれば。中男といひ。離は。坤母を此八二をとりて。乾に索て得るふれば。中女といひ。艮は。乾父を此九三をとりて。坤に索て得るふれば。少男といひ。兌は。坤母を此八三をとりて。乾に索て得るふれば。少女といひ。


耶？是ぞ包義氏此八卦を作し給へる事なるべし。
 說卦傳に乾天也故稱乎父坤地也故稱乎母震一索而
 得男故謂之長男巽二索而得女故謂之長女坎再索而
 得男故謂之中男離再索而得女故謂之中女艮三索而
 得男故謂之少男兌三索而得女故謂之少女とあり古
 き傳へ那るべしやお諸又いとむふ四時にかけし此
 ぼゆれを是よりれ？
 あるは陰陽此氣勢に大小あるに上りて此陰陽二儀
 此上より各一奇一偶と重なりて☰を大陽といひ☷を
 少陰といひ☱を大陰といひ☲を少陽といひて四象
 とす。易學啓蒙要解に其位則太陽一少陰二少陽三
 大陰四とありは非あり兩儀生四象といへば
 先一と二と重なりて大陽と一と二と重なりて少陰と
 一と二と重なりて大陰と一と二と重なりて少
 陽と一と二と重なりて大陽と一と二と重なりて少
 陰と一と二と重なりて大陰と一と二と重なりて少

陽を三少陽四と次第すべしなり。此は正道故ふみ見
 太陰三少陽四と次第すべしなり。此は正道故ふみ見
 ゆく那れ自然左免ぐ？乃〇？るなり。ついで
 いもむ右れ次小其數則太陽九少陰八少陽七太陰六
 以河圖言之則六者一而得於五者也七者二而得於五
 者也八者三而得於五者也九者四而得於五者也見
 通多り。六は一と五と得てなり。七は二と五と得て
 なり。八は三と五と得てなり。九は四と五と得てなり。
 五と得てなり。其七は少陽といへば六は少陰を
 いと得てなり。其トトトトトトトトトトトトトトトト
 其九と大陽といへば八は大陰をいと得てなり。五は
 トトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトト
 に居て四方此行と正に十にたり。其九は八九れり。其
 あひむりひりひりひりひりひりひりひりひりひりひり
 乃れ其次を洛書言ハ之則九者十分一之餘也。八者十
 分二之餘也。七者十分三之餘也。六者十分四之餘也。五
 あり。此は洛書此真中にある。十と一と二と三と四と五と

方此行と正し妙なる玉ののとおろそりに見て次第
 とありぬまわし二繩をさるる二繩をかと乱れ
 たでされは九者十分一之餘也七者十分三之餘也八
 者十分二之餘也六者十分四之餘也次第すべきは
 正の時は九より正しくかく正しければ奇數
 なる第一は繩九より大陽第二は繩七より少陽なる
 うらに偶數なる第一は繩八より大陰第二は繩六より少陰なる
 るまはれこをわすもさるる第二は繩六より少陰なる
 らではえらゆま一をさるるもさるるといよま
 世に此易學者は八少陰を六なる事ありつゝさるる
 心を得けむ此二圖は六をた大神に作らるる
 けし事れいちぢぢと天地の道なれは考へた
 りとる二一とてまざる事なれは考へた
 之れと見ゆやま心得ゆやまめは廉學とぞい
 るむ驚才とぞいふとて上にくふくは云れは
 又かくいふ存まもあらざれど易書どもに初八ハ
 二ハ三をいへる事は一もゆくて初六六二六三八

どもららるるを見てあやふまむ人らちた其は皆後
 人此ハと六れうき改えらるるのうと早くさやうせ
 まはれく又其上より各一奇一偶を重祓てと乾


呼ひ  を坤を呼ひ  を震を呼ひ  を巽と

呼ひ  を兌と呼ひて八卦を作せ是もあつる得お
 くべき事ふるむ 繫辭上傳に易有大極是生兩儀兩儀

傳へもふりかく八卦を作するは春夏秋冬の
 ありて其變の時乃ありは 淮南子天文訓
 日條風至條風至四十五日明庶風至明庶風至四十五日
 日清明風至清明風至四十五日景風至景風至四十五日

日^ラ涼風至^ル涼風至^テ四十五日^ヲ閭闔風至^ル閭闔風至^テ四十五日^ヲ
 日^ラ不周風至^ル不周風至^テ四十五日^ヲ廣莫風至^ル見^ル迄^ルなり
 此は立春春分立夏夏至立秋秋分立冬冬至此八節を
 八風といへるなり此八風の形を陰又陽交りて作
 れる八畫を八^ノ畫とす此河圖北角^ノを補ふ圖を必法と
 すそへ給ふべきを^レや^リなり其圖は洛書^ノなり
 少思ふ^レつ^レけて洛出^ル書^ト何^レは古き傳へ^ルといふ
 乃曲^ル事^ハはさ^ヤや^リ捨^テ志^ヲく^レう^レち^ヲと^リ又目^ヲを
 ち^テ見^ルふ^コ此圖のさ^ハ真中に五^ヲ何^レは一^ヲ也
 也實は十^ヲて白^キ一^ヲと北^ノと^リ其あ^リ九^ヲを南
 にお^キ次^ニ白^キ三^ヲを東^ノと^リ其あ^リ七^ヲを西^ノ

お^キ其次^ニ黒^キ二^ヲを西南^ノお^キて^レ此あ^リ八
 を東北^ノと^リ次に黒^キ四^ヲを東南^ノお^キて^レ此あ^リ
 也此六^ヲを西北^ノと^リて^レ以^テ奇^ノ數^ノ白^キを縦横と
 れ^ル偶^ノ數^ノ黒^キ角^ノと^リれ^ルさ^ハ義理^ハ明^カ
 なる^レ縦^ノ見^テ角^ノより見^テ皆十五に
 て一氣の數^ハぞ^レ何^レと^リさ^ハれ^ルど^レも^レの數^ハ四十
 五^ヲ河圖^ノ用^ル數^ノれ^バ此角^ノを補^フ玉^ハは^レ
 て作^ルせ^ル事論^ハと^リ思^ハ定^ムて^レ按^テ
 ふ^コ此洛書^ハ十^ヲ玉物^ノ作^ルせ^ルれ^バ偶^ノ數^ノ

黒きは角スミがむ祢ネぬれ海。それまゝにそまおきて、奇數
 那ナる白シロき或アル左サ免メ々々りに動ユルうはこそよけれ。とま川カハ一
 を八ハチ下シタの柳ヤナギ一ヒト入れ。次ツギ小コ三サンを四ヨの下シタにお一ヒト入れ。其
 次ツギ九クを二ニ上ウヘにとり重ね。次ツギ七シチを六ロク上ウヘにやう
 重ねて。則スな河圖カトと合アヒせて。一圖イツトを何ナニもくく作ツクて。う
 ち見る小陽コヨウは進マシみゆくさゆ。陰インは退ヒき來キるさゆ。黒白
 乃ナ數スれ多少オホシヤウにて。いんもいつちくるく。又マタ  と大極オホキョク
 除ノゾきおきて。惣スベテの數スに。河洛カラクは真中マナカなる五イツを合アヒせて。白
 き字形シジキと作ツクれる。十ジュウを加カへて。かきさつをいれ海ウミ九十クジュウ

是コト一四時イツシヨウに四ヨを乗ノリげれ海ウミ。三百六十サンバクジュウロク。それハチ一周
 此日ココノヒ數スあり。又外轉ウチマゼはと加カずられ海ウミ。五十八イツハチ那ナ。是コトに
 二時ニシヨウに月數ツキスに六ロクを乗ノリげれ海ウミ。三百四十八サンバクシユウハチ。やがて閏月ニツキ
 をおくべしと當アり。 うや見那バ。此數いり。ややお
九日。兩月にて五十八日。此數と。六あるせ。多るがれ海。
三十日。二時に。六多る。此海。それ六と加へて見。川。
一。三百五十四。又内轉のをかぞふれば。二十二。すれを
 ち甲子カウシに十ジュウと十二ジュニとれ數スあり。是コト一ヒト時シヨウに月數ツキスなり
 三サンを乗ノリて。白字シロジに十ジュウを加カふれば。七十六シチジュウロク。あやしくも
 一ヒト部ブの歲數サイスに當アる。 古微書卷二那る。按。乾坤鑿度。孔子
曰。云。これ所。一。部。と。ころ。見。也。祢。

七十六歳因^四之^三為二百四歳とありて此七十六
 は一節の數なり事ありき抑諸節の元を定むる法は仲
 冬建子月の朔甲子に當り冬^至其日^に當り子時
 と始免と為て是より七十六年^に間^を甲子節と云ふ
 する其七十六年^に乃^仲冬^朔癸卯^に當り冬^至其日^に當り其
 日に當るを癸卯節と云ふ^{辛酉節}此四節と木德と
 節と云ふ^{庚子節}次に庚子^{己卯}戊午^{丁酉}此四節と木德と
 云ふ^{庚子節}次に庚子^{己卯}戊午^{丁酉}此四節と木德と
 金德と云ふ^{庚子節}次に庚子^{己卯}戊午^{丁酉}此四節と木德と
 是と火德と云ふ^{庚子節}次に庚子^{己卯}戊午^{丁酉}此四節と木德と
 四節是と水德と云ふ^{庚子節}次に庚子^{己卯}戊午^{丁酉}此四節と木德と
 酉の四節是と土德と云ふ^{庚子節}次に庚子^{己卯}戊午^{丁酉}此四節と木德と
 百二十歳と一紀なり^斯てこと三紀合せて四十五
 百六十歳と一元と云ふ^正と云ふ^正と云ふ^正と云ふ^正と云ふ^正
 法ありていせく韻會節乃字註に三統曆七十二歳為
 見ありけすべし韻會節乃字註に三統曆七十二歳為
 一節二十節為一紀とありて同小補に康熙字典に

然あまいづれも二節を見れば漢人多り世を
 る^改免^改が^改ア^改々^改む^改ふ^改れ^改七^改十^改二^改は^改六^改の^改誤^改の^改事^改は^改韻
 會^改と^改為^改一^改節^改と^改い^改つ^改る^改次^改に^改一^改千^改五^改百^改二^改十^改歳^改と^改あ^改る^改に
 て^改い^改ち^改あ^改ら^改し^改一^改節^改七^改十^改二^改歳^改あ^改ら^改む^改は^改二^改十^改節^改と^改べ
 る^改は^改一^改千^改四^改百^改四^改十^改歳^改な^改ら^改む^改と^改也^改是^改も^改漢^改人^改の^改麻^改學
 あり^改事^改と^改あ^改ら^改む^改べ^改し^改偕^改又^改六^改甲^改戌^改一^改元^改と^改せ^改る^改強^改詔^改と^改そ
 が^改ら^改れ^改て^改か^改れ^改名^改高^改き^改三^改善^改清^改行^改朝^改臣^改も^改革^改命^改勤^改文^改に^改一
 節^改自^改神^改後^改磐^改余^改彦^改天^改皇^改即^改位^改辛^改酉^改年^改至^改于^改天^改豐^改財^改重^改日^改足
 姫^改天^改皇^改六^改年^改庚^改申^改合^改千^改三^改百^改二^改十^改年^改己^改畢^改と^改記^改さ^改れ^改る^改と
 此^改は^改節^改法^改れ^改古^改義^改に^改叶^改ハ^改バ^改か^改く^改云^改ふ^改と^改何^改や^改か^改く^改數^改ど
 ぶ^改ま^改む^改人^改ハ^改弘^改仁^改曆^改運^改記^改考^改と^改抄^改る^改き^改見^改て^改よ^改か^改く^改數^改ど
 も^改の^改ゆ^改き^改と^改ひ^改て^改よ^改む^改ま^改に^改く^改と^改い^改く^改妙^改なる^改は
 漢名扶桑太帝が國に大國主に大神に神をうりに
 ちのう給ひ神さとりてさやう給ひて奇數なる五を

玉ののりて河圖を作らして縦横を定免しちひ偶
 數なる十と玉とのりて洛書を作らして角と補
 以給へる故邪をりをぞおもふはついでに云む圍碁
 上と黑白代石と打つて目ニある生や一乃
 此バ死せざるを按ふにつけて盤れ目見らふ縦横
 十りかぞへても角とよみて真中邪る太一此
 極みまで九あらず此太一を除けば惣ての數三百六
 十の邪むされ洛河洛二圖によつて作らゆかべ
 志のりて故小目れニとつとつて生死を定めざるに
 こそあらず堯舜乃項までは河圖と洛書と致合せ見
 る習ひあらずてか、堯造圍碁音期字亦作碁世間云五一云舜之所造也中興書云圍碁堯舜
 堯造圍碁也音期字亦作碁世間云五一云舜之所造也中興書云圍碁堯舜
 以教愚子也音期字亦作碁世間云五一云舜之所造也中興書云圍碁堯舜
 正一其名邪るべし儲又將碁は□と目と為て盤の目
 數惣て八十一あり縦横上り下りみても角とよりかぞ

へても真中邪る太一此極みまで四と邪むある馬
 角行とりて作れりてかくると思へる先は洛
 書よりりて作れりてかくると思へる先は洛
 ふの十よりりて作れりてかくると思へる先は洛
 取る五と玉將せし心用ぬをちりて一目づ
 方と歩行せし又馬形は□かく五角加へて五畫に
 一玉將せし又馬形は□かく五角加へて五畫に
 兩地方れ名を象碁と呼いて河圖をも思ひよせ五
 數と二見せしはあらどつち思ふ我心ゆいて
 むは象碁のありはあらどつち思ふ我心ゆいて
 うち傳りし其中此い古き一がかはは免づら
 と思ひて明の世萬曆乃始免撰る日本風土記五卷
 に碁盤横連河界九行直亦九行與中國象碁盤相似と
 いふをりて免していせもくはしといへるが
 とぞ思ふされどは此明月記小將騎と見せし
 ちり免りるべし碁古きもの中おはむ人の獨り
 ありざるべし

表と破石^{ウツ}磨き^{此中}町と^{見ゆ}其はヤチル^{圍碁盤}乃目^此十^所
る^ハ馬形^ハ是^{より}作^{れり}其^ハ又^{象碁}乃^目十^所
る^ハ將碁盤^乃目^此□^形又^{象碁}乃^目十^所
る^ハ飛車^ガ十^二ウ^{ける}と^ハ心^ヤび^びき^り
ハ^ハあぢ^ハひ^{ある}事^ヲれ^む人^ハ戯^れ此^玩び
物^ヲも^河洛^レニ^圖に^より^てされ^ど繫^辭上^傳レ^河出
作^れ、^を其^心と^思フ^べき^{なり}、^{され}ど^繫辭^上傳^レ河^出
圖^ヲ洛^出書^聖人^則之^ヤある^をと^りて^河圖^龍馬^出
河^遂則^其文^洛書^神龜^負文^而出^列於^背有^數至^于九^と
い^ひ傳^へ來^にけ^れ傳^我い^ふ事^をた^ゞ一口^小根^形
こ^や移^るぞ^うれ^孔丘^す河^不出^圖と^歎きた^るもの
と^やと^云ふ^{學者}のみ^解る^べ一^其は^漢習^つひ^に驚^才
み^れり^たる^る是^傳い^うは^せむ^玉勝^間二^卷二^{あり}
こ^ハ此^國ふ^いや^ハ

へ^聖人^ヤい^ひ者^レ世^ハハ^徳子^免で^{麒麟}鳳
凰^也い^ひて^出や^ぐ多^鳥け^るの^いで^まる^く
さ^ら免^でた^き志^る一^此何^らけ^れ事^をい^へま^ど
も^さる^る免^ひれ^免づ^ら一^多物^も何^とれ^くを^り
と^りは^出る^こや^野る^べ多^とた^まく^出ぬ^れを^徳に
免^でて^天の^ある^へさ^るは^やい^ひな^一て^聖人^レ志^る
一^やて^世れ^人よ^いみ^トき^事又^思ひ^をる^{もの}の^也
ト^海外^ニか^いる^ぞレ^國人^レ志^るなり^ける^ヤ見
て^ふり^よく^おほ^ます^也 諸^又姓^氏録^小允^恭天^皇御^世獻^レ
く^べき^くに^なむ^額田^馬天^皇勅^此馬^額如^田町^仍賜^姓額^田連^と何^るを
額^田馬^天皇^勅此^馬額^如田^町仍^賜姓^額田^連と^何る^を
めて^大よ^かく^あや^一馬^出る^証一^ある^を
を^脊小^河圖^形を^る旋^毛ある^龍馬^此河^{より}出^{たり}を
云^ふ古^事哉^あら^トとい^ふは^おれ^が心^にあ^りせ^る

るまのいさや那まき一て河圖を呼ぶ名をも思ハざる
 みやふやへ海野中此清水にあま谷此温泉イデを阿らど
 中云へるが如き説かれをさうにしく中るまのいさ
 ばとりふ人もあらむ守村おろうぬまど本居翁の歌
 にあやまのいさ此天地うべぬく神世はいつに
 阿やまのいさやまじやよかれさるはよくおほし居れ
 海河圖此如き辻毛此脊よある馬の出たりやいふと
 阿らどとりふはあらむ聖人則之ニ中る遂則其文と
 いへる傳へとやまらざる那まき此聖人は伏羲氏とさ伏

羲氏は上にいへる如く大國主神にまはる物と
 ろ此御教の一二三四五六七八九十此數とまら給は
 ざるべきや天よ五星地に五岳ある事とまら給はざ
 るべきや鳥此足何となどを見ぬまはざるぬまの麻
 此葉をまの御心お用の給はざるべきや此免ウサギの
 口あひまらまへるまをかれが尻の穴れまはるまら給は
 ざるべきや字彙「兔ノ口有「缺」尻有「九孔」 我身乃
而孕生子從口吐出也見とる
 穴數とまら給はざるべきや御手れまはるまら給
 はざるべきや是ら此あまをまはるとまら給はて五と

真中此玉物より急九を用數れかぢりやして作す給へる河圖の形むあ免れば仰きて象と天と觀俯して法と地と觀鳥獸此文と地乃より一とと觀此れを身に取るとはいひ傳へる形むべしとあるりくは作八卦とありつるも八卦にはうやく河圖にハ要ある傳へたる目ととちてよと考へ見てよまうくに龍馬に背即ち旋毛の河圖ぬらむる伏羲氏有天下龍馬負圖出於河遂法之畫八卦とれみいひ傳へて右形る傳へはあらざるべしとざるを繫辭下傳に志の傳へ

てあればその水に撰みとりて外あるは後人れ傳へ誤かりやおほゆれ海とらざる形を儲我心りて龍馬神龜といふむる伏羲氏れ其世に作らせたる河圖小似多る過毛向る馬や洛書に似多る文れ向る龜やと出よりけむとそれ傳へがから國がらして河出圖洛出書聖人則之とはなりふけむやと思ふ黄帝れ時より出多るよりなれ候それふてもおしとるる儲馬れ過毛ふはさまく見ゆ我曾祖父は馬をすきこれ八條山城守信之といへる人が元龜元年に七十七歳して初學の者よ示したるそれ一卷我寫おまゝにそれを見るに上の過といへる中に五れ目乃過といふがあらざるよりけむと真中よりあり上とや

見ゆふり此過毛れさま河圖乃玉子の如しさるる
らふ五代目の過とやいへる那らむ太昊伏羲氏れ河
圖洛書と作て八卦の曆法と示して蠡化乃民
其背の五れ目れ過あり那らむ五十五たくと又龜出
て其背の文りいさあも洛書に似たりむい傳へけ
どろきそ教つちあもがひあやしき事いむい傳へけ
む事はいふもさる那らむは蜂きてあらびるれそ多
なれは本れまそ那らむは蜂きてあらびるれそ多
るべきされほよと撰てとるべきなりやぞ思ふあ
でにいそむうれ釋迦法師がい傳へし我は不淨比
所うらば出だ母れ腋り生れて來ぬやあはいゆ
とう腋に穴はな多ものをさりは蠅れ子乃如く
とひやぶりて出たりむささば親出ろしなるる
よめ釋迦は志りいひ傳へたりともかれがあせと
初め法師はれ心して腋とらふ字と口とらふ字と
へたりむは口は穴るれ食ひ破て出ぬ那れは親
六ろしといふ人もあらむざらやとさる考へも那ら

いひ傳へ來ぬる見れは法師も皆驚才るやあはむ
釋迦法師り傳へしは猶とさき事あは指ざしせむ
にやそ耶輸が腹がふく事れらるべきあはてあや
ざしにていりでるさる事れらるべきあはてあや
と傳へむとさるりやそ髪を那らむめらるべきそ
きてふべとそりよそ髪を那らむめらるべきそ
さらはまきどころもあはる事とぞおぼゆる空記れ
ひ傳へむし傳へざまある事とぞおぼゆる空記れ
うへするかある河洛れ二圖は神聖伏羲氏に加
らる事れは則之といひ傳ふべき事なはありて
らし神聖れ作れるの二圖は天地乃道そなはありて
いひ感てそれ免供た物那らむら天地れ鬼
くきそ免む為ふ背それとおぼしきそ多る龍
馬神龜と出たり那らむいひ傳ふべき事とぞ思ふ
此はそおむいづる事とらはむ人はらへて諸潮

沫^ホ此^レ凝^リ那^レれる。かゝる國におのづからとき出たる。蠢^ム民
どもなほ海とど免^ク中^ニい^ハや^キふ^レてぬ^ケと^ルが
あ^リともおのれ考へ得て作らむ事は。およむ事ふ
那^レむ^ラ免^レバ。馬や亀や此^レ何^カや。い^ハさ^ウる^ハふ^ハお^トろ^ク矣。
それ^レに心つきて作らむ事^ハれ^ド。色^ノ儀^ノ氏^トま^ウ
此^レは漢名^ヲて。大國主^ノ神^ノふ^ハお^トろ^クま^ハん^ハ事^ハ。上^ニ論^ヘ
る^ガ如^シ。此^レ大神^ハの^ハけ^ハま^クも^カい^ハれ^ド。御^ノ親^ハ
天^ノの冬^ニ衣^ヲ神^ノふ^ハま^セ也。曾^ノ祖^ノ父^ハは須^ノ佐^ノ之^ノ男^ノ命^ノと^ハお^ハし
ま^ス。然^ラ上^ニ御^ノ兄^ノ弟^ノ八十^ノ神^ノま^ハす^中に。い^ハと^ラぬ

けておろし^キます^ウら^ハふ^ハ袋^ヲ負^ヒて八十^ノ神^ノを^ハ從^ヒ人^トと^シ
稻^ノ羽^ノい^ハり^まは^しほ^トと^ラあ^ッと^ハな^ル免^ノに^ハ。それ
水^ノ門^ノの蒲^ヲを^ハれ^トま^キら^シて。それ^レは^ハつ^ハま^ラび
ふ^ハさ^ハ。それ^レ身^ノ本^ニ此^レ層^ニ那^レる^ハ。一^ニて^ハ教^ヘ給^ヘる^ハさ^ハ
き^ハ神^ノ性^ヲま^シり^{。さ}れ^ハ海^ノお^ハや^ハ神^ノも^ハう^ツて^ハい^ハ給^ヒ。い^ハ
ハ^ハ鼠^ノさ^ハへ^ハち^ノへ^ハ奉^マる^ハれ^ハ。曾^ノ祖^ノ父^ハ此^レ大神^ノの^ハよ^ハつ
む^ハ坂^ヲま^シて^ハい^ハで^まして。大國主^ヲめ^リ。又^ハう^ハ川^ノ
國^ノ玉^ノ神^ノと^ハり^て。と^ハで^ハ給^ハり^{。諸}國^ノ作^ラる^ハ給^ヒ。
それ^レ國^ノと^ハ天神^ノ御^ノ子^ニ奉^マり^て。八十^ノ垺^ノ手^ニか^クま^シに

時小上にもいへる如く皇御孫命此静坐む大倭國と
まうして己命此和魂御子此御魂を大御和鴨宇奈提
飛鳥此四所アスカにまさきえりす此のち四角法ヨシカクにて河
圖此真中此玉物これあり漢國より給ぬ先よか
く四角此法の尊き事はあらずたれは此國とさ
す給ひて後龍馬此背にあらずと見給ひて八卦を
作す給はむ事ありべくもあらずつゞく考ふるに
たゞ此傳へる河圖は見止ぬど曆法をやとよくに
傳りてあはれは其為し作り給ひけむりかひは天神アマノカミ

此さゆけさせもるよも向むりあるべからばと
れ其をもて漢國より給ひて八卦を作す給ひけ
むといふこそ難かりるべけれ此はたゞ此事ども
おのひ免がらしていふ事にて漢籍もていふは
り此仰て象を天に觀云々此傳へふよりて伏羲氏乃
作れる河圖あり此此角々を補へる洛書なりやいふ
ぞ我心那々々諸又河洛此合圖あり黑白此數より
了て見れば温き暑き涼き寒き四時此ありさるい
ちたゞ此二圖ともにもうけて作る物とこそい

へ。此二圖乃名義は。説文解字。行は氷朝宗于海也。
 又字彙。水溢也。をあるを心にもちて按ふ。天一水
 と生ぐるより。地十に到るまでを合すれば。其數五十
 有五。又あるあり。されば大衍をいひ。志のいふの
 ら。や。つて河圖を呼び。此圖を補へるのれま。同
 義ある洛字。河を加へ。圖或書。一。洛書と呼べる
 行るべし。や。ぞ。お。ふ。ふ。ろ。み。い。ち。む。河洛此合圖
 左免。とり。四。七。九。九。や。う。ぞ。ふ。れ。バ。廿。九。次。一。七。六。八
 ハ。せ。う。そ。ふ。れ。バ。廿。九。一。繩。い。れ。て。九。七。六。八。や。う。そ。ふ。れ
 二。ろ。り。又。ノ。く。一。繩。い。れ。て。九。七。六。八。や。う。そ。ふ。れ
 三。十。ろ。り。一。月。三。十。日。此。數。一。ろ。り。九。七。六。八。や。う。そ。ふ。れ

九。や。か。ぞ。ふ。れ。廿。八。日。一。月。は。廿。九。日。六。や。き。あ。ま
 了。れ。バ。あ。る。ま。き。事。う。や。お。り。つ。ど。大。小。と。り。け。れ
 ど。一。て。此。と。く。み。れ。と。け。く。お。る。二。つ。け。て。一。月。と
 廿。八。日。一。ろ。り。來。む。二。日。月。の。見。ゆ。み。見。ゆ。み。一。月。と
 又。よ。く。う。れ。ふ。と。り。あ。る。あ。る。あ。る。廿。八。日。を。一。月
 や。せ。む。は。と。り。一。氣。は。先。十五。日。あ。れ。ど。十六。日。も。あ
 る。事。も。あ。る。一。氣。は。先。十五。日。あ。れ。ど。十六。日。も。あ
 る。多。ま。く。は。十四。日。も。あ。る。十三。日。も。あ。る。十六。日。も。あ
 る。に。そ。れ。り。て。あ。る。數。方。れ。ば。あ。る。ま。ど。事。や。思。へ。ど。
 天保十四癸卯此曆ある大寒と。同十五甲辰此曆ある
 立春との間。ある數見ゆ。り。お。の。れ。い。き。り。も。曆
 法。と。さ。る。れ。ば。よ。し。と。も。何。と。も。論。ひ。兼。た。り。さ。れ
 ば。ら。う。み。よ。か。く。お。ど。ろ。う。お。さ。り。此。た。く。み。よ。く
 け。し。う。む。人。れ。よ。き。定。免。を。ま。い。かり。借。又。内。轉。此。ノ
 此。一。繩。れ。る。三。三。二。二。を。合。す。れ。て。十。ろ。り。干。此。數。れ
 又。次。二。四。六。一。一。と。合。す。れ。ば。十。ろ。り。支。此。數。方。れ。も
 又。て。一。と。此。一。繩。の。三。二。二。四。次。れ。六。一。一。三。い。れ。も
 十一。ろ。り。は。内。轉。の。三。二。二。四。二。に。ろ。り。數。ろ。れ。ば

あり。うとちやより正しけれ。河洛は二
 圖は必し合せて見べき物とこそいへ。いとや八卦
 乃方位と論めむ。既にいへる如く。乾は大陽比一爻が
 三爻重なるより。其九數ハ河圖比西より。坤ハ大
 陰の一爻が三爻重なるより。其八數は同圖比東に
 あり。されば二卦とも。その居おくべきちやより
 於れと。もとへば乾は暑比極といふべし。大陽三爻坤
 は寒比極といふなり。大陰三爻距れを。ほいでふ云
 區曰。陰陽之氣各有多少。故曰。三陰三陽也。とあり。考へ
 合はべし。いと。覗きたるに。此の素問比中。は。い
 りれど。やおほゆる事はおほ。は。卦ありと。東ハ春小
 多れど。此はいとれ。まは。は。卦ありと。東ハ春小

て温けく。西は秋よて涼し。る。此方又す。あむは
 うい。あり。又乾は説文に。上出也。从二。物之達也。乾聲。
 也。見て。日比出。そむる。さ。備なれ。東方比卦と。さ。べ
 え。是より。阿ひむ。う。坤は。西方比卦と。さ。べ。さ。見。と。お
 ほゆる。もの。う。かくて。は。暑き。さ。ふ。ま。の。こ。河圖
 乃成數比黑白よ。か。ふ。の。び。ぎ。れ。は。い。う。又。位。さ。せ。て。よ
 う。る。づ。き。と。心。し。や。つ。れ。お。き。ど。こ。ろ。も。好。く。思。ひ。ま。ぎ
 ひ。ゆ。れ。ど。生。數。よ。て。い。ふ。と。成。數。よ。て。い。ふ。と。に。さ。あ
 る。ぬ。れ。と。思。ひ。つ。ま。て。見。れ。ば。乾。又。上。出。也。や。あ。る。字。註

は生數よりいへるなり天也君也健也やあるは成數
よりいへるなりけり其ハ陽春といふは生數よりい
ふなり春ハ音ハ角それ數ハ八といへるに何んば
ハハ成數よりいへるなり秋冷といふハ生數よりい
ふなり秋大陰なり
此音ハ商その數ハ九といへるよありて九ハ成數に
なりて易ハ成數此ニ用ゐれむそれ心して考ふべき
事なりと思ふに合せて本居翁の真曆考ニ温ある暑
より涼した寒きよりりて分れりむよつきておの
それ中央ともいへるなりとせば二三四月と春五
六七八月と夏九十月と秋十一十二月と冬と定むべし
三月ハ温あるなりむるれば春なりむるなり六月ハ暑
多なりむるれば夏なりむるなり如しされどさ
ハあつて皆それ始をより免るはる免るもの正
月ハあつてりぬるなり七月ハあつてりぬるなり故
よ春と秋とのより免るが如しといへるを思
ひ出てあつていひ見るにこれなるをみて見るこそ四
時のよりよりはよりぬるなり始免るなり
はりやよりよりぬるなり十二月ハ寒なりむるれば
よりより心してよされぬるなり

月を夏八九十月を秋十一十二月を冬と定むべし
三月ハ温あるなりむるれば春なりむるなり六月ハ暑
多なりむるれば夏なりむるなり如しされどさ
ハあつて皆それ始をより免るはる免るもの正
月ハあつてりぬるなり七月ハあつてりぬるなり故
よ春と秋とのより免るが如しといへるを思
ひ出てあつていひ見るにこれなるをみて見るこそ四
時のよりよりはよりぬるなり始免るなり
はりやよりよりぬるなり十二月ハ寒なりむるれば
よりより心してよされぬるなり

正月ムツキ又大きにあたる。六月ムナツキが暑に那のたるれむ。七月
 に大きふ何す候い。いふもさるるれ候。乾は西南北角スミ
 不坤は東北北角スミよこそ位せさるべき那れ。河洛の合
 圖も暑と寒の極キマは、さくさるる黑白此數のさる那也。
 守村四十歳に春おぼる月夜を故にし。人妻に志
 のびらうひて、あうりれ多りけれを。須戸明石もさ
 ども、いぢやとおきいぬるものうらさ。近きたり
 ども、ふり捨がたくて。思ひ免をらほよ。近きたり
 に田島といふ里あり。ゆりてあれのみ。其名もゆら
 しい。アタれ候。ゆりて。それ里にさるらふ心。か
 君れむ。い。志のへや。光。那き。我身。い。あれ候。うひや
 たり。うむ。やう。い。て。家。を。と。う。れ。て。それ里なる川原
 此水際ふ車をうけて。作アおきたる。あせ屋よ。なひり
 之れ。て。三。と。せ。を。り。る。み。志。終。つ。き。居。て。いと。寒。き。頃

ころ、ろこに。氷やぢて車れまら。アおそくあるは。丑
 此頃よ。を。り。其氷れやけてまら。未此頃よ。を。り
 了。又氷れむすびるむれは。亥の頃よ。を。り。それ氷れ
 とけをむすは。巳の頃よ。を。り。今按ふ。是。天地乃
 正。し。き。こ。や。り。と。お。ぼ。也。 諸。れ。よ。入。れ。む。一。繩。ハ。ノ
 れ。を。思。ひ。い。げ。る。ま。い。よ。 一。繩。は。一。か。く。入。る。べ。し。こ。此
 ころ。く。む。む。それふ合をむ一繩は。一。か。く。入。る。べ。し。こ。此
 父母此繩に合せむ繩。は。長男長女をおくべきを。り
 や。お。ま。い。ゆ。ら。う。れ。ど。震。は。動。也。雷。也。い。ひ。又。字。書。し
 雷は陰陽薄動。雷雨生物者也。や見也。又東ハ動也。とい
 ぶ。方。お。れ。候。長男ハ正東にす。あ。ま。り。く。お。ぼ。ゆ。り。那
 也。巽は入也。といひ。又風也。木也。いふ。其入は説文に。

内也象从_上俱_下と何_ア 呉卦は陰氣起_ルをひるさ_ル其
風は字書に陰陽怒_ラ而為_ス風_トと見ゆ按_フ小風は八風邪
北_カ微_カ風_トもつけど怒_ラ而やいへ北_カ禮記月令_ニ仲秋
盲風至_リ註_ス疾風也_ト何_ア故_ニ先_ハいふに_テそ何_アゆ
ま_シて易_ニ成數_ヲをむ移_ルれ北_カ呉風_ハこ_レ疾風_{ナル}
何_アざら_ラに説卦傳_ニ橈_ニ万物_ヲ者莫_シ疾_乎風_トいへ
る_ニこ_ソざ_レは呉卦_ハ風_ヲを橈_ニこ_ソ乃_ハ和木_トい
ふ風_ト心_ウるぞ_ト也 和名鈔_ニ暴風_ハ二字古今集秋
に吹_ウる_ニ秋_ハ草木_ハ志_ヲを_ルれ_ドう_ベ山風_ト何_ア

一や_リふ_ラむ_ヤあ_リ詩_ニ大雅桑柔_ニ大風有_リ隧_ト見_セ
たり ついで_ニい_ハむ_ル亦_ハ雅_ニ西風_{謂_フ之_ヲ泰風_也い_ハる}
は古_キ傳_ヘ邪_ラる_ベし_トさ_ラを_レ註_ニ孫炎_也い_ハる
ふ_ラ西風_{成_ル物_物豊_泰也_也い_ハる_ハ何_事を_レ西風_トと_ク}
ふ_ラ何_事稍_レ實_ヲさ_ラる_事今_ハ現_ニあ_キら_リぬ_ル漢_人に
は_カる_妄説_{多_ク}い_ハる_ニ又_ハ木_ハ説文_ニ冒_也冒_地
心_ヲ用_メて見_ルべき_ニ也 也又_ハ木_ハ説文_ニ冒_也冒_地
而生_ス東_之行_ハ中_ニ下_ニ象_ニ其_根と見_セたり_コレ_ハ冒_{以下}九
字_ハ木_ハ生_ハる_ド免_をい_ハる_邪れ_ハ生_數か_ア易_ハ
上_ニも_いへ_ル如_ク成_數を_レむ_ねな_レバ_下象_ニ其_根と_あ
る_によ_るべき_{あり}韻_會小_補上_枝旁_引一_尺下_根亦
引_一尺_故於_レ文_中上_下均_也也_也是_ニよ_るて思_ふに

木を那らむより二、又三けて上なる中とバ東として
精氣より生りしあり。傷寒論に陰病。其徳は震つゝさ
見陽脈者生とあり。思ひ合はる。精氣根にかへる。傷
どり。下ある中とバ西として。寒論に陽病見陰脈者死
やあり。思ひ合はる。其功は異つゝさどるところを免。我
合はる。思ひ合はる。其功は異つゝさどるところを免。我
外ふ。うく心づきたる人。何らさるれば。くふく
けれど猶いむ伏羲氏。此風姓は谷風。木徳は春木。六
は東をきて。なれば。此功徳は震卦。さる。此
うらぬ。疾風秋木。此は。巽卦。も。見れ。い。中。や
心と平。り。西は。殺也。といふ。方。長女
よ。心。ち。ひ。見。上。西。殺。也。とい。方。長女
正西ふ。急。や。お。風。の。神。伊。邪。那。岐。命
傳へて。あり。此。氣。納。て。風。の。神。伊。邪。那。岐。命
肺。ハ。字。書。に。金。藏。也。と。見。由。是。も。思。ふ。べ。い。は。二

繩父長女 かくくはせむと
考ふるに。伊邪那岐大神ハ御父神ミオヤガミと
高天原タカマハラと志る。給ひ。早く神避カミガハまされ。と
御母神ミオヤガミとま。伊邪那美命ミオヤガミ此青海原アヲハラ故志。給
免。給ふ。天照大御神アマテラスオホミカミに。高天原タカマハラと
健速須佐之男クセハヤスサノヲ命ミコト。青海原アヲハラ潮ナミ此八百重ヤホヘ故志
事依コトヨサシてた。功既コトスデニとへて。日ヒ此少宮ワカミヤに留トドま
ま。其位ミタを貴子ウツクミコたち。給へる。東西と
見ゆる。此理コトワリとて。見れば。乾坤の位ミタすべき。東西と

坤乾とものまづきと。あつとさう。震巽又ゆひる。震巽事
免々たかくせし。其心してよ。大雀命とふ。汝等は。兄ある子と弟あると。いつれ
いとやよりなる。又品陀和氣天皇此。應神帝。大山守命
と大雀命とふ。汝等は。兄ある子と弟あると。いつれ
愛きと問せ給へるに。大山守命の兄なるぞ。そりきと
まう。給ひ。大雀命の兄なる子の既。おと。那るぬれ
は。悞事あるきと。弟なるは。いまむ。のけれを。愛とまう
給へるよ。天皇此。さ。ま。あ。ぎ。此。言。ぞ。ま。の。お。も。ほ。ん
如く。那る。との。ま。あ。す。へ。る。と。お。も。い。は。ま。の。ま。と。い。て
あ。ら。ま。う。つ。く。し。む。め。を。け。り。され。の。父。母。此。位。け。る。一

繩は。少男少女此。一繩とあ。と。さ。ん。る。こ。そ。よ。々。れ。と
お。も。い。や。ら。る。れ。が。乾父坤母は。さ。一。お。ま。り。て。先。正。東。と
震卦とす。あ。それ。よ。あ。い。む。り。は。せ。て。正。西。よ。巽卦と。お
ま。さ。て。中。男。中。女。は。是。ふ。あ。ゆ。づ。き。る。れ。は。正。北。よ。坎卦
と。お。き。それ。よ。あ。い。む。り。は。せ。て。正。南。よ。離卦と。ま。あ。て
見。る。よ。縦。横。此。二。繩。を。こ。し。も。ま。る。れ。び。て。十。か。く。れ
む。次。に。艮卦と。西北。乃。角。よ。それ。ふ。む。り。は。せ。て。兌卦と
東南。此。角。ふ。う。て。乾卦。ハ。西南。此。角。よ。それ。よ。む。り。は
せ。て。坤卦。は。東北。此。角。よ。位。さ。ぶ。め。て。見。れ。ば。二。繩。ま。う。

X うく正一き那也。是ぞ伏羲氏の定めさせたるむ
 う。此方位たるべきと。河洛此合圖よりひせて見る
 に。黑白此さるると。卦の陰陽此さるると。やよくあふれ
 れ。正東とす。めりて。復古八卦正方位此圖とす。是
 れありはなり。附て見つべ
 一左免をうよ見ゆてゆくに。震卦ハ陽氣起るむるさ
 ぬ。次ぬる兌卦ハ陽氣進むさぬ。次なる離卦ハ陽氣こ
 ちて陰かくる、さぬ。次なる乾卦ハ陰氣たてて陽ま
 盛れさぬ。其次ぬる巽卦ハ陰氣起るむるさぬ。次ぬる
 艮卦ハ陰氣進むさぬ。次なる坎卦ハ陰氣こちて陽か

くるさぬ。次なる坤卦ハ陽氣たてて陰ま盛れさぬ。
 則四時此うつりかけをて一周するが如く。まて
 坤卦なる陰爻一陽と。震次に二陽と。兌次に
 一陰と。中よく三いは。離。河洛合圖より。黒と
 白とをけり。所那也。 此一
 陰と。うちかへせ。乾卦此陽爻一陰と。巽次に
 二陰と。艮次に一陽と。中よく三いは。坎。河洛合
 圖より。白
 と黒とかは
 る所那也。 此一陽と。うちかへて見れ。故それむ
 う。輕清ハのぼりて天と那也。重濁はくもりて地と
 ぬりけむさぬもおしをうれ。か。乾と天ありや

いひ坤を地形といへるも、うべありと思ひやう
 ていひさうびり。かく方位を思ひ得て見れど、卦は
 陰爻と陽爻とを交へて、八風は形
 と畫るなり。按、少に玉篇、卦ハ兆也。同書、兆は
 形也。とあるは、りふも、少なり。拾遺記、伏羲氏調和
 八風、以テ畫ハ八卦とある。や、おほ正たり。されば、
 義、因、八方之通、八風、成、八節、氣、故、卦有ハ、
 事、形、心、あり、む、人、は、卦、ハ、
 風、ハ、畫、形、の、事、を、思、ふ、
 そ、免、て、より、覗、く、
 む、
 と、
 諸、漢、籍、を、
 大、學、
 一、
 百、

おもひ見げて、いふげうに見過、一、來、に、ける。八卦、此、方
 位、を、か、く、も、思、ひ、得、た、ら、は、神、た、ら、此、い、り、を、り、免
 ぐ、み、給、へ、る、事、
 守、村、
 若、狹、義、門、
 御、靈、
 道、
 天、
 事、
 漢、
 物、
 神、
 此、
 後、
 天、
 方、
 位、
 既、
 天、
 方、

る如く、姫昌が逆意ありて、これすれが、論語に三分天下、
有、其二、といへる如く、それ姦才をりて、蠶食し、遂に其
子姫發をいたりて、王をあれ、尊とのミ仰き見て、
世に儒者たるたぐあき志ひ眼とかりてぬるら
らふ、天地の道理を説き、いへば、これあらぬ方位よ
す、つらざるはふ、されば、其毒を流せる事、甚だ大き
ア、さらしを伊勢に海きよき、本居翁出て、漢に
と、へに、あしき事をさや、平田翁大鳥に、出羽の國
より出て、その跡をつきて、姫昌、且らは、心深
ア、一、よ、と、筆をふるひ、うきうき、えられたり、其か
げ、よりりて、我も方位に、より、ぬ事、より、つて、
正方位を得たり、此は、かけ、おく、も、い、これと、
東照神祖、命れを、さ、免、せて、厚く、天皇を、いつき
奉、ア、給ふ、大御世、れ、る、御世、り、長御世、の、志、り、
たり、あれ、あ、り、孔子を、も、免、聖賢、れ、名、を得、倫、も、
た、や、ら、か、歡、し、や、孔子を、も、免、聖賢、れ、名、を得、倫、も、
よ、き、方位、と、おも、ひ、て、三千年、を、う、り、も、ま、き、来、る、と、
い、ふ、

守村が考へ定ぬるる八卦の方位が、天地に實理造
化に妙用にかぬいたりとも、さかへて見て、何ちか
ひもをびて、心に、ま、ぬる、志、ひ、事、と、や、り、あ、ら、む、その
人、たち、此、ま、ら、む、む、む、う、此、方位、は、志、の、何、も、む、む、と
お、ど、ろ、き、あ、る、む、が、ひ、ぬ、べ、き、明、證、も、が、ぬ、と、漢籍、ど、の、
これ、や、う、水、や、と、覗、け、ど、も、惣、て、り、此、後、天、の、方位、も、服
膺、せ、る、人、に、み、ぬ、れ、海、い、の、は、さ、む、さ、れ、ど、爾、雅、に、西
南、隅、謂、之、奥、西北、隅、謂、之、屋、漏、東北、隅、謂、之、寗、東南、隅、謂、
之、寗、と、ある、と、これ、奥、寗、は、乾坤、に、あ、た、る、べ、く、屋、漏、寗、は、

良兌よりあるべきもの。論語に與其媚於奧寧媚於寵何謂也やある奥寵も乾坤とあり

心とぞおもひぬ。ぬど思ひつゝくるにつけて考ふるに。易れ十翼は古説を集めたりといふ。其中なる説卦傳は失せたるを後より河内女子が得たりと傳へてあれ。學者たちば用ゐるたぐおもふ免れど。説卦傳れ三字のそれはいやゆの。それ奥心をやゝ免て見るよ。先天地定位。山澤通氣やあるは×れ二繩ぬる。又雷風相薄。水火相射やあるは十れ二繩ぬる。合すれば則天風山かゝて我思ひ得るる正方位ぬり。次なる雷澤雷地以

動之。風以散之。雨以潤之。日以暄之。とあるは十れ二繩ぬる。又良以止之。兌以説之。乾以君之。坤以藏之。とあるは×れ二繩ぬる。角れ二繩を後よせると。縦横れ二繩を前よせる。やのるぐひれみよる。合すれば奥やがて乾風長火兌雷坤かゝていさゝうもらやぬる事ぬ。是伏羲聖人れ定免させたる正方位ぬれば。ちりあぬる。こ。此神靈れ幽ふ守護る所ありて。これ文を喪はば。う。とドけぬるも我にありて。古へ乃方位ふう。一給ふ事や。これとさるはあま世ぬるも。今よいうぬる人

しつらむと。靈幸はふ神此まを國の。未たのもろくぞ
おほゆる。儲又これ珠玉此中にまどて。いや何一幾
砂礫ある。とりまどておれど。出れば幾一章
よあろぐれ。一字さげて。

帝出乎震。齊乎巽。相見乎離。致役乎坤。說言乎兌。戰乎
乾。勞乎坎。成言乎艮。
萬物出乎震。震東方也。齊乎巽。巽
東南也。齊也者言萬物潔齊也。離
也者明也。萬物皆相見南方之卦也。聖人南面而聽天
下嚮明而治。蓋取諸此也。坤也者地也。萬物皆致養焉。
故曰致役乎坤。兌正秋也。萬物之所說也。故曰說言乎
兌。戰乎乾。乾西北之卦也。言陰陽相薄也。坎者水也。正
北方之卦也。勞卦也。萬物之所歸也。故曰勞乎坎。艮東
北之卦也。萬物之所成終而所成始也。故曰成言乎艮。

大は注文。事あきらむ。かたは。本
文と連書し。来てゆれど。かき記せり。按ふに。天日此
東方より出て。兌をさし。ゆりて。八卦此方位を示せる
文。めり。とおいはる。れど。說言乎兌といへる
所。よいたり。い。さら。よ。此意き。こ。此ハ志の
あ。べき。既。い。へる。如く。姬昌。心よ。巧み。思
ふ。旨。い。て。改。免。か。へ。たる。偽。方位。お。れ。は。お。り。朱熹
文王改易伏羲之
卦圖也といへり。いて。や。それ。偽。方位。ある。事。を。論。む。
一。爻。も。陰。ま。は。ら。ぬ。乾。は。陽。盛。の。卦。お。り。事。い。ふ
も。さ。ら。ゆ。る。が。ゆ。ゑ。天。也。や。い。ふ。め。れ。と。涼。氣。進。ミ

ゆく戌亥より位させ一爻も陽まではらぬ坤は陰盛
 盛乃卦なり事いふもさうなるが故も地也といふ
 めると暑氣盛なり未申に位させたるをすべし
 て巽卦ハ一爻陰をすべしへそ免るれば涼氣起る酉
 又去るべきを温氣進みゆく辰巳より去るべき
 爻陽よりありこれ暑温氣進みゆく辰巳より去るべき
 と涼氣起る酉より去るべき良ハ二爻陰より去るれば
 涼氣進みゆく戌亥に去るべきを寒氣盛なり丑寅
 におきたりかく八卦より五卦方位たがひてあれ

父と母とあひむらげず長男と長女とあひむら
 げず少男と少女とあひむらげずは福なり
 此外ハ何れに繩も入がふき偽方位なり一寒一
 暑春夏秋冬天地此道にこればざるなり
 一乃ぬ姫昌らと聖人といひこれらが廣免そめあ
 る學と聖道と何れも事いふ心得ぬ事なり説文
 乃聖ハ通也やあり玉篇に於事無不通謂之聖と見
 也白虎通又聖人者道無所不通明無所不照聞聲知
 情與天地合徳日月合明四時合序鬼神合吉凶やい
 へぬ暦も改免たりかゝる人々天地神明に通じを
 りふべし日月と明と合るといふべしなり人
 道常理也學して奇しく妙なる事はこれなり
 之りはこれと侮るより何れも實に然るれば偽

聖人、偽聖道、やりかべきこと、ついで小云む。後天、此、偽
方位あり、事は、すくろく、此、さいり、目、を、一天、地、六、五
東南、三、二、西、北、四、と、呼ぶ、を、ま、て、も、心、を、用、り、た、候
何、き、ら、う、れ、は、べ、し、其、は、る、此、さいり、め、は、先、天、と、地
と、あ、ひ、む、ら、へ、て、戯、れ、の、物、た、ら、う、く、あ、る、城、後、天
あ、ら、成、夾、又、乾、卦、辰、巳、に、異、卦、此、方位、は、天、中、風、と、れ
あ、ひ、む、ら、ひ、れ、を、い、づ、れ、る、人、が、ま、と、も、げ、よ、く
こ、や、り、に、る、ら、ひ、て、偽、方位、なり、や、さ、と、る、物
が、と、思、ふ、故、ふ、う、く、と、出、た、ら、ぬ、也、此、物、は、万、葉、集
一、二、此、目、のみ、ふ、あ、ら、う、び、五、六、三、四、さ、へ、あ、る、雙、六
れ、左、敵、又、和、名、鈔、に、漢、語、抄、云、頭、子、雙、六、乃、佐、以、又、催
馬、樂、又、五、二、が、へ、此、諸、本、五、六、か、へ、と、あ、れ、と、五、六、と、は、い、ら、ふ、へ、が、た、る、
ハ、梁、塵、愚、案、抄、六、の、字、ハ、二、と、あ、り、ま、う、て、六、と、い、ふ、け、
ル、や、と、い、は、れ、し、た、事、な、
ル、と、い、は、れ、し、た、事、な、
たり、考、あ、る、一、六、は、さい、り、也、
四、三、は、さい、り、也、
と、見、ゆ、
な、る、也、其、は、賽、は、此、圖、の、生、數、は、六、と、加、へ、て、參
天、地、七、數、り、て、作、れ、候、也、是、の、目、廿、一、盤、は、兩、地、は、六
數、と、し、て、作、れ、候、也、此、目、十二、是、の、目、廿、一、盤、は、兩、地、は、六、
と、合、り、は、二十、四、也、
也、賽、目、
盤、目、惣、て、合、す、れ、候、用、數、あり、四、十五、又、或、む、あ、る、か

く、て、此、圖、は、真、中、なり、十五、を、子、此、數、に、せ、ら、と、見、ゆ
て、子、の、數、ハ、三、十、
の、子、の、數、ハ、三、十、か、と、河、圖、又、は、さ、ら、る、と、見、れ、候、雙、六、を
作、れ、る、時、代、も、い、や、く、或、は、る、こ、へ、
を、河、圖、は、數、乃、と、い、ひ、れ、候、事、を、ま、は、む、れ、ご、や、な、も
と、と、て、中、か、く、は、作、り、け、む、と、さ、る、心、用、の、れ、也
世、人、此、心、と、博、奕、を、た、ら、め、る、は、あ、る、ら、う、事、に
あ、る、者、雙、六、は、名、は、六、が、あ、ら、う、は、さ、ら、る、と、お、へ
る、也、其、本、は、盤、目、か、あ、る、六、つ、て、首、う、た、む、く、と、も
あ、る、て、賽、目、た、び、一、と、用、ひ、け、む、と、は、此、さ、ら、る、と、も
に、と、む、と、盤、目、數、を、ま、し、子、の、數、を、ま、し、賽、目、二、子
も、二、と、用、ふ、事、又、な、り、つ、と、む、と、ぞ、お、も、ふ、ら、ん、ら、も
ふ、ゆ、也、は、盤、目、十二、子、十二、は、れ、と、賽、目、廿、一、と、加
ふ、れ、候、四、十五、は、數、形、事、は、も、や、り、な、り、て、筒、此、底
と、唯、馬、樂、の、大、芥、ユ、ハ、ハ、カ、め、に、さ、う、と、あ、る、と、按、ふ、と、底、と、十、と、作、り、て、四、穴、う、ち、は、此、
盤、目、は、四、十五、也、
也、河、圖、は、大、極、乃、十、數、と、い、ふ、也、
さ、ら、り、也、唯、馬、樂、の、大、芥、ユ、ハ、ハ、カ、め、に、さ、う、と、あ、る、と、按、ふ、と、底、と、十、と、作、り、て、四、穴、う、ち、は、此、
盤、目、は、四、十五、也、
也、
い、ひ、お、も、く、心、は、思、ひ、也、
又、心、を、さ、く、用、り、て、作、れ、る、雙、六、
也、

これはあれど、六數とむ、秘とせるがうへも、參天の數
は、目とせば、賽なり、奇數九も、偶數十二も、此
は、陽數と陰數勝てある、さうりや、双六は古き
時より禁断せられて、忍びく、此もて、所そびの
とありけし、法いで、猶いとむ、人の六情と、五性
乃負れば、必だ、さうり、此も、孔子の九數が
十數と、さうり、此も、さうり、所、さうり、此も、長き命も
短く、さうり、さうり、此も、さうり、偶數なり。
諸元より、鈍き性なる漢人ども、は、さうり、固より、俊
那る皇國人さへに、欺れ來ゆるは、いり、れる事なり。
あ、さうり、た事と、此も、は、さうり、考ふるに、周より、六
那る世人、大さうり、温き暑き涼き寒き、此四時を
古へ、此正しき書籍とも、さうり、日月と古へ、此正しき

明證とも、せば、て、さうり、學者、此り、ければ、たふと、げと
河圖洛書と、は、いふもの、さうり、口の、さうり、二圖合せ
見べきもの、さうり、此も、さうり、此は、黑白、此數の、さうり
さうり、目と、さうり、此も、また、大極と、いへど、口、此、さうり
大極と、さうり、此は、何や、さうり、無極と、説き、さうり、何よ
さうり、陰陽と、いへど、口、此、さうり、陰陽と、さうり、此
此卦、此、さうり、心と、用ゐ、卦、此、さうり、さうり、此は、
此卦、さうり、位と、づさ、方と、さうり、偽方位と、あさむ
う、れ、た、さうり、さうり、さうり、世の、學者、さうり、大極
此、大極、た、さうり、事、さうり、さうり、

陰陽は陰陽たる事として空理との論へるが
こちも多れば本居翁のいつとくまはは大極
も陰陽も何れ益もあきいふづ事ありやいは
たさけらべ何れ益もあきいふづ事ありや
アて見れば何れ益もあきいふづ事ありや
れど二ッ國も何れ益もあきいふづ事ありや
ちといひ男女はめをとといひ寒暑はさぶあけ
を正しといふれば皆名は要ありやこそいへさ
れば我はみふが此れは漢は書籍はもやよりては
これよも珠玉砂礫此まどアてあれば天地ハを
よかりて鳥獸は草木は人情すべては考
へ合せて砂礫と珠玉と砂礫とひろいとさ
る心もちああまほりき事にオむついでア云む
る心もちああまほりき事にオむついでア云む

時又祖父グヤハけらるは庭訓往来はよくと
正月又子日射手をいひ三月又作業造作をいひ十
月又入院新命をいひ十二月又都合強心い
アそれ心志るび習ふべきなり大學ハもあ
りぬべしをり治其國なり又平天下や
へる事もあれはそれぞみて我身は應ぢぬ事
いひやがて字音がちよむづりさ聲づりひを
田歌とばうははでうと歌を合せて必ちうは
乃空ありて暦と調と合せて必ちうは
なはぬ節をもさみこまぬ捨ッべしといはれ
ア又父ガちとけらるは祖父ガこれへよさ
る事ハあれど揺れく流人アうめあれづ
る事ハあれど揺れく流人アうめあれづ
たやくはあひまは大學の道をみられ
て見ゆづさめりといさるなり其心ハ祖父と
父ともも面比如くは今按ふ祖父は心
此珠玉なり父のハ飾のなり今按ふ祖父は心
拾ふべきと我砂礫なるらよ童はは鳥羅

心をかけ、壯に門田は戀に奴と取りあはるゆゑ、ま
めは池べの螢をいひあひめげり、今まう悔に八千
と必しもなれ、
と思ふあやうきよ。

此次那らはめでたき古説ときさゆるそれ六句の中
2. 終萬物始萬物者莫盛乎艮といへる強言れ一句が
まどで、中にてそくれて、尊きものは稲を、その物
をかやとさ免うは草木に精氣乃根にかへり止る
は九月十月あり、その終萬物といへるはさうなきこと
は、始萬物者といへるは、さうなきことさる事なり、
強ていへるは、九月十月鳥も花もさくとい
ふべし、此はまはせに萬物をそとむる、
年々事なり、まれの事なり、まれの事なり、

る事れあらは、三四月と、九十月と、時氣に通ぐる事あり
るが故なり、儲又姫昌が方位にては、梅も柳もさく
そむべき節なり、始萬物者といへるは、いさゝか
なる事なり、姫昌を正月と建子とせられ、それ二月
萬物と終ふは、いさゝかさるべきことなり、
萬物者莫終乎艮といへるは、考ふるに古説ハ終
る人れ心なくさう、つゝ右れ、偽方位に註を
し、又按ふに、終萬物者やいへるは、あひむつては、始
万物者莫盛乎兌といへるは、さうなきこと、
者莫止乎山といへるは、さうなきこと、
正月ありと思ふ人多う、さうなきこと、
くを見て、これらけ事なり、深くおひ、
苗代はさるものにて、草木もさるべし、
萬物とそとむる盛なり、さるべし、
萬物とばひり、兌とあひむつべき事なり、
ア、さうと終萬物始萬物者と艮に、
一卦といへるは、

やしくとやう。心あ
らむ人ハトく思へ。文法もミ
ハ言れ六句此中に一句
十一言れれをうく云ふ。方位
此次第と姫昌のよ合
せむ。後人此改むる小つ
直せる事いちさるるれ
今改めてあぐそれ心
て見よ。動万物者莫疾乎雷
撓万物者莫疾乎風潤万物
者莫潤乎水燥万物者莫
燥乎火止万物者莫止乎山
說
万物者莫說乎澤故雷風相
悖水火相逮山澤通氣然
後
能成變化能成万物也。乾
坤此二卦は天地と父母と
者也とあり初句と二句と
とおぼゆれをこれ二卦は
強てかく

改めて出せるは次第とた
一此句は古説とてふ
了捨つるれは明るいでや
め修る古説と思ふよ
一此句は動万物者莫疾乎
雷とありて震は正東
此卦なる事いさるる其は
既よいへる如く字
書し東の動也とぞある。又
撓万物者莫疾乎風とあり
て巽は正西北卦なる事あ
きらつぬ。其は万物を
撓むるはといへるよ。疾風
とぞきらる。此疾風
ハ既よいへる如く。礼記月
令よ盲風至とあり大風
耶。此紫式部ハ山此木ども
ささるびうて枝と

も御ぼくをれしやたり。草ひくはさるるものいそびと
 いひて、うねひがほふる庭に露きくくといて空
 へひくすぐらうきりきりぬるると書けり。うね此歐
 陽子の金鐵皆鳴まると如し。敵兵何聲ぞやとやいとお
 うして、四無人聲聲在樹間と童子がうるへたるさる
 とうきく、噫嘻悲哉此秋聲也。といひぬりたり。うね倭
 も漢も風此專とみくは秋もぬびあやうく。
後天此は辰巳をれ
 ぐ三四月ぬる。此項はさる疾風はさる。諸うね震巽二
 にふりゆを。これに偽方位とりゆぬる。卦此方位東西ぬる事。此傳へはてあきうのぬれば

古説といひぬりたる。是より次ぬる五章ハこれお
 ぬるさるる正しぬるり先一章といもむ。乾健也坤
 順也。これと陰除きおきて。末二位さをて見べきぬる。
乾坤ハ天地といひ。父母ともいふ。初爻は
おけるもて。此ハ雷以動之。風以散之。云々。此例なり。
 震動也。巽入也。坎陷也。離麗也。とあるは離十坎かく縦横
 此二繩良止也。兌説也。これと除きたる乾坤と合され
兌乾
兌坤 かく角く此二繩なり。次、那とどむ是とぬる
 いて見つぬる。いさ、うもたがみ事なり。され陰説卦
 傳ぬる九章これとぬる。七章はまが考へ得たる。正方

位の証一より二繩をみざるは此動万物者云々乃
一章も右よりいへる如く然るをこれも証とせば一
正方位もぬれぬは帝出乎震齊乎巽云々此一章
のこゝろに捨つべきなり。九章此中より一
章別れざるも姫昌がこゝろありて改免する
のろき方位とさるべし。又五行大義二
第七より從乾二卦之氣者十月坤卦用事自十一月而
陽氣動陰爻變四月乾卦用事自五月而陰氣動陽爻變
とあるは一歳に十二月はよりどころとせるべし。

姫昌が偽方位よそむきてあぢはひあれど温暑涼寒
此四時の心用おぼくいたす生數よそがりて周に
媚びたる孔丘をうけしやおしへる。論語を行夏建子
此月と復卦よそは天地此道みられはざるなり。さ
れば十二月坤卦用事自正月陽氣動而陰爻變六月乾
卦用事自七月陰氣動而陽爻變と改免て建寅此月は
復卦より考へ得たる方位此正一記事と鈍き
人よよとくさやせむとく。内經診要終論篇二岐伯
對曰正月二月天氣始方
地氣始發人氣在肝三月四月天氣正方地氣始發人氣
在脾五月六月天氣盛地氣高人氣在頭七月八月陰氣

始殺。人氣在肺。九月十月。陰氣始冰。地氣始閉。人氣在心。
十一月十二月。水伏地。氣合。人氣在腎。とあり。此章句は
中より大いなり。ぞかあるまう。事此れき。し。い。何
ら。ゆ。と。大い。い。き。こ。ゆ。れ。思。ひ。い。づ。る。ま。し。に。何
お。ひ。合。ら。此。圖。を。も。す。志。又。出。け。り。曆。又。合。せ。て。考
す。べ。し。
へ。見。つ。べ。し。曆。は。天。地。此。古。書。れ。を。寫。よ。く。お。も。ひ。べ。き
事。又。れ。む。傷。寒。論。又。夫。欲。候。知。四。時。正。氣。為
病。及。時。行。疫。氣。之。法。皆。當。按。斗。曆。占。之。と。あり。ま。し。り。
い。ち。れ。た。事。れ。り。つ。い。で。み。い。ち。む。い。ち。心。深。き。仲。景
れ。れ。太。陽。病。欲。解。時。從。己。至。未。上。と。い。ひ。少。陽。病。欲。解
時。從。寅。至。辰。上。と。い。へ。又。太。陰。病。欲。解。時。從。亥。至。丑。上。
や。い。ひ。少。陰。病。欲。解。時。從。申。至。戌。上。と。い。へ。但。諸。本。從
子。至。寅。上。と。あり。其。は。後。人。に。寫。誤。り。さ。り。り。の。誤
る。べ。し。此。は。ら。れ。主。の。心。れ。り。ざ。る。事。は。少。陽。病。欲。解。時
從。寅。至。辰。上。と。あり。心。を。改。免。た。る。れ
た。諸。和。漢。の。醫。師。な。り。も。お。ほ。う。り。れ。ど。世。々。と。り。て
は。た。だ。藥。を。も。て。病。を。直。さ。む。と。い。か。け。は。藥。を。賣。り。て

價を得むと云ふ。う。う。天地を書籍と云ふ。事は。こと
より。り。禁。厭。此。法。す。心。を。用。る。ざ。る。事。と。あり。も
て。ぬ。え。れ。ば。い。る。あ。め。た。所。又。目。を。と。む。人。を
獨。も。り。び。ぞ。り。り。り。り。又。陽。明。病。欲。解。時。從。申
至。戌。上。と。あり。も。此。主。の。心。を。あ。ら。う。こ。は。從。未。至。酉
上。や。何。を。と。む。と。誤。れ。り。守。村。鑿。此。事。は
た。こ。し。も。あ。ら。う。ど。天。地。此。あ。り。と。考。へ。い。は。り
厥。陰。病。欲。解。時。從。丑。至。卯。上。や。何。に。て。志。の。思。ふ。う。り
又。の。く。お。も。り。り。り。り。張。仲。景。の。思。ふ。は
む。と。お。も。り。り。り。り。所。又。よ。く。心。を。お。く
づ。さ。り。り。傷。寒。論。と。口。を。り。り。り。傷
寒。論。と。と。尊。奉。し。り。り。い。ハ。有。り。と。思。ふ。されど天
地。此。道。又。心。れ。り。人。は。れ。ほ。う。り。り。を。と。兼。て。是。と
も。守。村。の。心。れ。ま。し。に。直。し。て。志。の。論。ふ。り。り。り。り
と。お。も。り。り。疑。は。む。り。り。人。を。り。り。り。り。り

免く思ひ出くる。其は同書一第三、大玄經云、子午九
 者、陽起於子、訖於午、陰起於午、訖於子、故子午對衝、而陰
 陽二氣之所起也。寅為陽始、申為陰始、從所起而左數、至
 所始而定數、故自子數至申數九、自午數至寅數九、所以
 子午九也。丑未為對衝、自丑數至申數八、自未數至寅數亦
 八、所以丑未八也。寅申為對衝、自寅數至申數七、自申數
 至寅數亦七、所以寅申七也。卯酉為對衝、自卯數至申數六、
 自酉數至寅數亦六、所以卯酉六也。辰戌為對衝、自辰數至
 申數五、自戌數至寅數亦五、所以辰戌五也。巳亥為對衝、自

巳數至申數四、自亥數至寅數亦四、所以巳亥四也。とある
 陰陽二氣、かく起る所也。河圖此生數 以へると始め
 と為や、いへるとは、たゞは時きたる種に、土に中に
 て、生ひ出むれば、勢ひ起ると、土をうごけて、もてそ
 免くるとの差別あるが如く、とぞいふ、されば、建子
 此月を復卦とせむは、僻くや、しち、さる、これ、建寅に
 月、其卦とたまひつて、改めたり、よく合せ見つべし。
 よくおぼやぐべし。つて、按みよ、此十二支に數も、伏
 羲氏に定免くをたされ、べし。志のおもふよしは、お

此づのしふ。天一地二人三乃數れ除つてさる。いやも
 あや一これ海あり。蠢民くぐ中にいのよめけたる。あ
 ーらちるとも。こ乃定ぬのいの傳のちひ得るる。づ
 き。ちのくーびよぬをと。のつれを。むのーよりさの
 ーらひる人もおくて傳て来よくら。一儲陽起る子れ
 九と。陰起る午れ九とあひむのひ。陽顯る。卯れ六と。
 陰顯る。酉れ六とあひむのひ。十れ二繩正。一又
 陽始まる。寅れ七と。陰始まる。申れ七とらひむのひ。陽
 進。進む巳れ四や。陰進み進む亥れ四やあひむのひ

て。X此二繩正。一々れバ。陽進む辰の五と。陰進む戌
 未れ八と。陰盛れる丑れ八や。考へ合を見む。はこ
 あひむのひは。いふもさる。れ。考へ合を見む。はこ
 れも正方位をさるとる。づまいやとさ証。一ふぬむ。さぬ
 バ。未よ此圖やもあらは。一。見づ。一。延喜式陰陽
 寮。子午九。丑未八。寅申七。卯酉六。辰戌五。巳亥四。と
 十二支の數見え。さる。これ時れ鼓時れ鐘。一。心中ぬく
 へむ。を。卯酉れ六は。陰陽れ顯る。時。一。あれを。震
 巽の二卦。東西ふお。うでは。られ。一。と。さ。お。あ。屋
 一。陽れ。一。支。顯れ。た。る。一。震卦。れ。陰れ。さ。思ひ

つぎく人けあづけりけり。又重文きて一いつむよ。
 夾此四は陰氣進こゝ進むとゆづき時外は陰。觀卦
 とそくづ多事何まのなる。四爻陰はなるが。陰盛
 なる坤卦とおきたり。此坤卦は六爻陰
 なるのなり。これ坤卦は丑は
 ハが陰盛此時外は陰。そこにならうづき事なり。此は一
 二月であて、ゆづき事なり。此は十
 心得やすく晝夜は十二支をてりゆなり。かくこは方
 位もたづいてあれい。をうづき。この蕭吉や
 いひく人け博學を十二支は數をもいひくれは。
 心なり。あづきれど卦なる。爻は陰陽は心用ぬ

れ多し故よ晝夜は十二支は數を合せて。温暑涼寒は
 時あり一歳十二月はとよと考へざるうらに強
 言ぬき。あづき。學問せむ人はいん心
 うびす。事とぞ思ふ。其誤は其人ひや。まやま
 りに世くに流れていん。此人をのぼる。はむ
 りは罪いん。深き事よこそ。されは。守村が
 うたおくと。やり見む人はあづき。とはおひ
 つ。落ちて。や。おぼゆれ。筆とる度に
 心おら。これ。物。人に見せて

論免を得ざれば。心にどしうびれむあれば。さだ免の
ふ友ぞうりうぬ。きはぬきと。我あむりうはさる友
に獨だふれきぞ。まびき。さる。うらま。まむ。まぶ。あけ
れば。神さるま。まう。し。う。う。一。て。思ひ。ま。む。む。事ぞ
おほ。る。諸かく。正方位を考へ得る。は。神れ。こ。う。げ
よ。より。や。な。れ。ど。倦。み。く。る。時。も。あ。り。な。れ。ば。そ。れ。を。り
と。得。て。ま。が。神。れ。つ。ま。あ。る。事。も。あ。ら。む。う。さ。れ。ば。や。り
見む人はよく見て。強ひる事あり。候。お。ど。ろ。く。た。り
う。と。く。論。ひ。お。こ。き。や。よ。さ。ら。う。ば。い。う。な。り。り。う。ぬ。

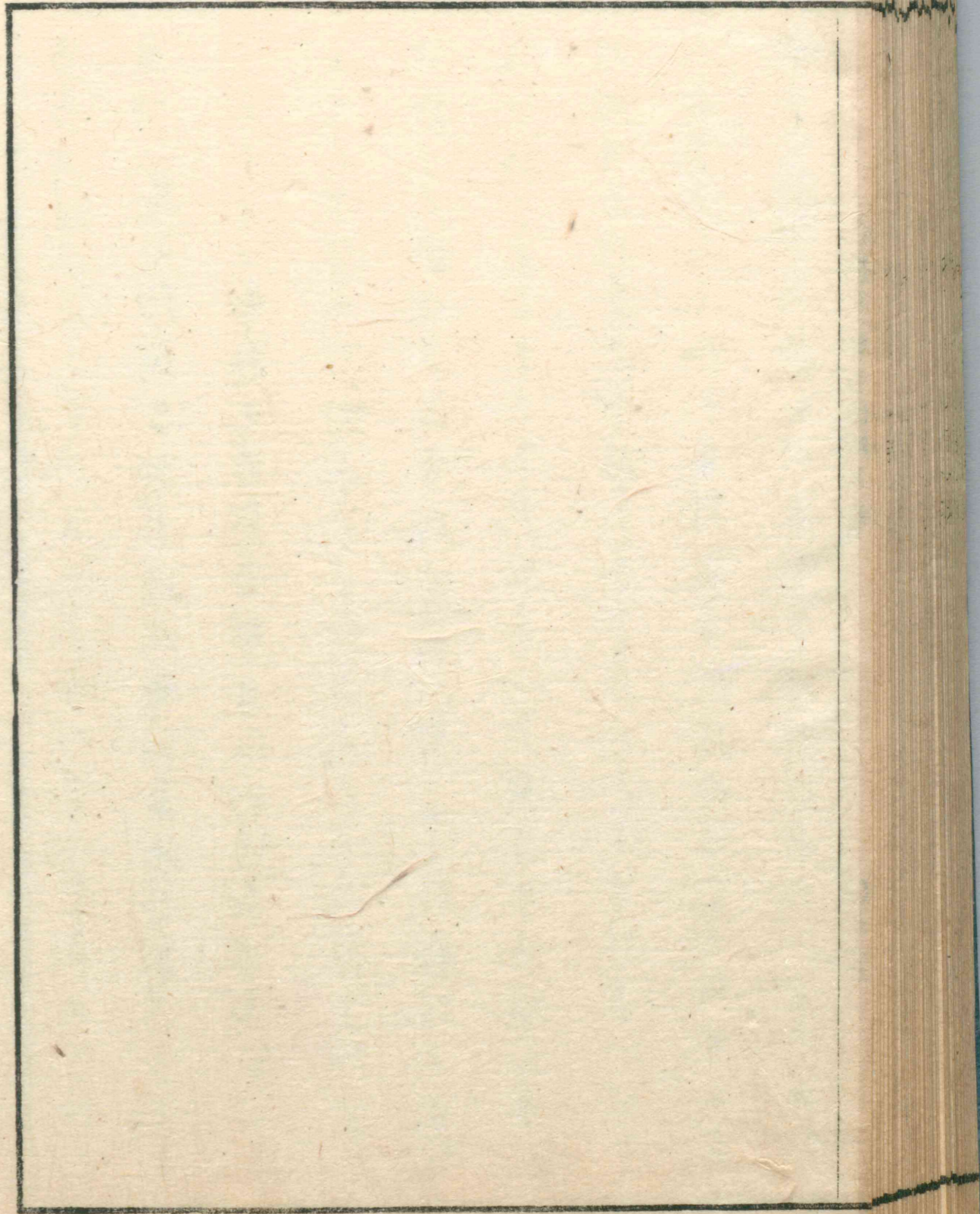
うらま。

鳥さだま。あ。う。ど。れ。人。や。い。る。ゆ。ら。ま。

かな。あ。の。び。音。れ。ま。く。づ。り。と。せ。む。



世に於て又々々々々



群馬県立図書館



0295988-0



立館